



大澤苑美 (おおさわそのみ)

東京藝術大学大学院修了。2008年～2011年一般財団法人地域創造に勤務、「公共ホール現代ダンス活性化事業(ダン活)」を担当。2011年より八戸市にて、南郷アートプロジェクト、八戸工場大学などアートプロジェクトの企画運営のほか、八戸市新美術館準備等八戸市の文化行政を担う。



西澤真樹子 (にしざわまきこ)

2003年大阪市立自然史博物館を拠点に標本作成サークル「なにわホネホネ団」を結成。16年間で鳥類約2000点、哺乳類約1500点を作る。団員は現在400名。2011年以降は東北沿岸部の博物館の再生に関心を持ち、博物館の仲間とともに、現地で子ども向けのプログラムを企画・実施する活動続ける。



寺沢秀文 (てらさわひでふみ)

両親が元満蒙開拓団員であったことから、飯田市内で不動産鑑定士事務所を経営しながら日中友好活動、残留孤児帰国支援活動、満蒙開拓平和記念館の建設・運営等の活動にボランティア従事。満蒙開拓の調査研究などにも携わる。平成30年3月に第2代館長に就任。同館の運営をボランティアと行い、利用者の自己実現の場としている。



佐々木雅幸 (ささきまさゆき)

専門は文化経済学、都市経済学。金沢大学経済学部教授、立命館大学政策科学部教授、大阪市立大学大学院創造都市研究科教授などを経て、2014年4月から2017年3月までは文化庁文化芸術創造都市振興室長。「創造都市ネットワーク日本」の顧問として、国内の様々な創造都市の取組を支援。主な著書に『創造都市の経済学』、『創造都市への挑戦』など。



日本各地には、設立趣旨に立脚し真摯に活動を行っている博物館、美術館、資料館、それらの館の活動を支えている地域のみなさんがいます。

1部では、地域に生きる私たちがミュージアムを活かし、より良く生きる糧とするためのヒントを地域、利用者とミュージアムが特色ある連携、協働を実践しておられる3館、3地域の事例から学びました。

2部では、ミュージアムが地域の文化拠点となり、単なる箱ではなく生きるミュージアムとなれた時、地域の文化はいかに創造されるのか、ミュージアムの可能性についてお聞きしました。

活かす 生きる ミュージアム

ミュージアムは誰のもの。
ミュージアムはすべての人のもの。

フォーラム

日時：1月18日(土) 10:00~15:00

会場：福島県立博物館 講堂

1部 (10:00~12:00)

講演1「ここに生きる誇りと幸せを得る—八戸の文化事業」

講師：大澤苑美氏（八戸市まちづくり文化推進室主事兼学芸員）

講演2「市民が育てる博物館—なにわホネホネ団と大阪市立自然史博物館」

講師：西澤真樹子氏（なにわホネホネ団団長／認定NPO 法人大阪自然史センター職員）

講演3「平和への願いが紡ぐ協働の現場」

講師：寺沢秀文氏（満蒙開拓平和記念館館長）

ディスカッション

講師：大澤苑美氏、西澤真樹子氏、寺沢秀文氏

モデレーター：川延安直（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

司会：小林めぐみ（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

「活かす・生きる
ミュージアム」

事務局・小林めぐみ

おはようございます。朝からお集まりくださりましてありがとうございます。

ライフミュージアムネットワークは昨年度より福島県立博物館が事務局になり、震災後私たちが大切にしたいと思うようになった「いのち」と「くらし」をキーワードに、そこにミュージアムのネットワークも使いながら、震災の教訓など、これから大事にしたいことをみなさんと一緒に考え未来に残していければと思います。

今年度の活動報告をエントランスホールでしております。お帰りの際ご覧いただければと思います。福島県を学びのフィールドと考え、各地でテーマを設けてみなさんと福島から学ぶということを行ってまいりました。その総括となります今回のフォーラムはテーマを「活かす・生きるミュージアム」としました。みなさんの周囲にも親しみのあるミュージアム、大好きなミュージアムがあたりだと思いませんか。そんなミュージアムをみなさんに活かしていきたい。どうしたら活かす生きるミュージアムにできるのか。今日は午前中に3人のゲストにお越しいただきました。そのお話をお聞きして、みなさんとも議論していきたいと考えています。午後にも続きます。長時間ですがお付き合いをお願いします。

では講師のみなさまをご紹介します。トッパバッターでお話しいただきますのが、青森の

八戸市からお越しいただきました八戸市まちづくり文化推進室主事兼学芸員の大澤苑美さんです。

続きまして大阪からお越しいただきました、大阪市立自然史博物館を拠点に活動してられる「なにわホネホネ団」の団長西澤真樹子さんです。

そして3番目にお話しいただきますのが長野県阿智村からお越しくださいました満蒙開拓平和記念館の館長の寺沢秀文さんです。

これから博物館、美術館をいろいろな方と一緒につくり上げ、時には館を引っ張っていく、そんな元気な活動をお聞きします。みなさんの周りの博物館にもきつと参考になるお話をたくさんお聞きできると思います。

お昼の休憩をはさみ1時半から午後の部をスタートします。午後は文化庁地域文化創生本部主任研究官、大阪市立大学名誉教授でいらっしやいます佐々木雅幸先生にお話をいただきます。午後の後半では赤坂館長も登壇してのお二人の対談で今回のテーマ「活かす・生きるミュージアム」についてお話しいただきます。

では大澤さんよろしくお願いたします。

講演1
「ここに生きる誇りと幸せを得る—
八戸の文化事業」

大澤苑美

おはようございます。会津も雪深いと聞いていましたが、太平洋側の八戸のほうはどうや

消えて、もう今はないものもありますが、つい最近までそういった風習も残っている地域です。こういったことを後世につないでいく方法として、作品をみんなで作ることによって、遠くの未来まで届ける。歴史としても遠くまで届けることをできたらいいなと、今ちょうど撮影をしているところです。島守地区で3月に上映することになっています。

アートを媒体として

工場大学の話をしたいと思います。

先ほど工場がたくさんある町ですと言いました。工場をまちづくりとか観光、文化、産業、色々な視点から捉えて、私たちはアートを新しい気づき、思考をもたらしてくれるものと定義しているので、そのアートと組み合わせることで地域の宝として工場の魅力と価値を再発見、発信していく。工場って一頃やっぱり公害のイメージが強く、町の中で邪魔というか、変なものがモクモク出ているじゃないかと言われていた。そういう中で働かなきゃいけない時代もあると思います。今はかなり環境に配慮されています。今はその地域にどう貢献していくかを工場としても考えなければいけない。そこで私たちがアートを媒体として、工場と市民がどう仲良くなっていけるのか、工場は私たち八戸人にとってどういう誇りなのかということを考え、提案しています。

工場力って何だろうと
アートで迫る

震災の時に八戸で一番被害が大きかったの

ら雪が多いです。今日は八戸のお話をしたいと思っています。今日のテーマ「ミュージアムは誰のもの。ミュージアムはすべての人のもの。」私もすごく共感します。

なぜなら博物館であれ、植物園であれ、それは決して専門家だけのものではない。文化がそこに生きる人たちのDNAというか習慣になって染み込んでいくものだとしたら、そこで生きている人たちみんなに関係している。好きとか嫌いではなく関係していると思っています。本当にミュージアムはすべての人のものという意識で私も運営しないとけないなと思っています。

八戸に生きる誇りと
幸せを得るための

八戸に生きる誇りと幸せを得るための文化事業について、ここで話してあげればと思います。つい先日、芥川賞と直木賞の受賞が発表されました。実は八戸にもノミネートの方が2人いました。ダブル落選してしまっただけで残念でした。でも9時のNHKニュース、芥川賞の話題の中で3分ぐらい八戸ブックセンターの話題を取り上げていただき、ラッキーと思いました。八戸にはちよつと変わった文化施設がちよこちよこあります。八戸ブックセンターは八戸の市営の本屋さんです。行政がやっている本屋さんです。書店もそうですが、文化がなかなか地方都市だと成り立ちにくい側面もある中で、行政が積極的にその町の知的な資源や文化環境を育てていこう、関わっていこうと取り組んでいるのが私たち八戸市の文化政策です。

はっちができたのを
きっかけに

そのきっかけとなったのが2011年に開館した「八戸ポータルミュージアムはっち」です。文化施設でもあり、観光施設でもあり、中心街の活性化施設でもあって、貸し館もしている公民館みたいでもあるという説明しにくいところ。中心街の真ん中にある街を元気にしている施設です。震災の1ヶ月前にオープンして、震災の時は避難される方の拠り所になっていました。はっちができたのをきっかけにして八戸は色々な文化事業をやっています。

八戸工場大学

アートを好きではない方にも
関係しているのです

先ほどのはっちでもアートプロジェクトをやっている、すべて行政が主催です。こういういったアートプロジェクトをやっていくことで、さっきのテーマ「ミュージアムは誰のもの。アートは誰のもの。」にあるように、文化資源やアートをみんなのものにしていく試みです。アートを好きではない方にも関係しているのです。様々な市民の方に関わってもらう試みを色々やっているところです。南郷アートプロジェクトでは、今年は大駱駝艦、白塗りをした踊る「舞踏」と呼ばれる踊りのカンパニーですが、彼らに来てもらうダンスの映画を地域の人たちと撮るプロジェクトをやっています。

虎舞、昔のお葬式、花嫁行列といった風習。

八戸のアートプロジェクト

南郷アートプロジェクト

八戸市に合併した旧南郷村のまちづくり、に主にダンスを用いたアートプロジェクト



八戸工場大学

八戸の工場を文化的視点から再発見し、魅力拡大につなげるアートプロジェクト



はっちが主催して行うアートプロジェクト

浜の暮らしを撮影する「魚人」（田附勝）、八戸でのスケート発祥の地を掘る「堤にもどる」（深沢孝史）等

活かす生きる
ミュージアム

が工場でした。クレーンが流され経済的な被害も大きかった。一つずつ「今日はこの工場が再開しました。こっちの煙突から水蒸気が出ています」というニュースを聞いて市民は日常に戻ってきたと感じました。工場が私たちの元気印でもあったことに気付いた。八戸は工場の町で、工場が元気であることが私たち市民のプライドでもある。ということで八戸の工場力って何だろうとアートで迫るプロジェクトを「八戸工場大学」と呼んでいます。大学という形式なので、やっていることは大学になぞらえて三つあります。

講義と工場のお話、こういう製品をつくっている、実は世界ナンバーワン。そういう話を聞く。アーティストに来てもらうこともあります。そして実際に工場を見に行く課外活動。受講生の方はこれが一番好き。工場を見に行きたい。

もう一つは私たちが一番やりたいこと。サークル活動と呼んでいます。工場と連携したアートの取り組み。この三本柱でやっています。

市民メンバーと一緒にやっています

受講生は年に35人ぐらいの定員で募集します。工場の話聞いて、紙の工場から紙を提供してもらってワークショップをやる。セメント工場があるので、セメントをこねてみる。そんなアートのアプローチでいろいろな工場を楽しむ。船で海から工場を見る。実際に中に入れてもらうことも最近が増えてきました。運営事務局は市民メンバーと一緒にやっています。工場が好きな市民の方は結構いらっしゃるん

イベントの最初の日は出なかつたのです、炎が。船の到着が遅れて。そうしたら何で出ないのですかという電話が。普通はなんで出るのだと怒るのに、今日は出ないのですかって電話がきた。

工場の息

新規に立地した企業を正しい理解のもとに受け入れ、円滑な経済活動がしてもらえるような市民との関係づくりに期せずしてなった事例でした。その後、煙突シリーズで「虹色の狼煙」を大平洋金属という工場で行いました。海と何か運河沿いに見える工場です。みなさん煙、煙って言うのですがほとんど水蒸気です。これは1月のイベントでしたが、私たちがハアーツと白い息を吐く、水蒸気と一緒に、ということは、これは工場の息じゃないかという見立て。ちょうど60年の工場、60歳の工場おじさんが自分のことを喋ると、どんなことを喋るだろうかとこの字幕を工場の壁に投影し、水蒸気にライトアップして、みんなで見ようというプロジェクトでした。

市民に見てもらえる

この時、最初、工場の方は、安全にできるならいいですけどって言うぐらいのノリでした。だけど、やっていくと、だんだん面白いかもしれないとなった。自分の工場が市民に見てもらえる。しかも従業員のご家族に見てもらえるというのが結構高いポイントだった。お父さんは何をしているのかわからない。どんな工場かわからない。こういう機会があると

ですね。その工場好きの事務局メンバーたちと今年はどういう講師を呼ぼうか、どの工場に来てもらうか、イベント運営をこうしたらもっと面白くなるかな、誰が担当するかというようなことを一緒にやっています。中には工場で実際に働いている方もいます。工場の職員ではないけれど、出入り業者としてテナント屋、配管をやっていますということで、やっぱり工場に関係している人が八戸市には多いんですよ。

鉄塔から炎が出るらしい

具体的にどんなことをやってきたか。八戸の沿岸部に液化天然ガスのターミナルが2014年に稼働開始しました。この工場ができる時に、鉄塔から炎が出るらしいという情報が市長からありました。どうやってたら工場とアートプロジェクトができるかちよっと取り掛かりがなかつたのですけれど、思わぬところから情報が来ました。冬だったので「サンタクロースでも煙突に貼ってみれば」なんて冗談めいたアイデアも飛び出しましたが、工場の人からは、いやそれは燃えますからやめてくださいと言われました(笑)。でも何かやりたい。工場と何かアートプロジェクトをやりたいと思った。ではこの炎を眺める、愛でるアートプロジェクトをやりたい。液化天然ガスが気化する温度がマイナス162度、そこから出る炎ってどんなのだろうというプロジェクトをやったのです。60mの鉄塔から20、30mの炎が出ました。で、これは安全な作業上、圧を調整することで出るのでですけど、他の地域のコンビナートで、火事だ、爆発する、何

理解してもらって、従業員も働きやすくなるというところで協力していただいた。そうしたら、このモクモクとした水蒸気をそのイベントの時間に出すということに工場の人が一団となって協力してくれた。リハーサルした時よりも減茶苦茶出ちゃって、私たちの光の量がむしろ足りなくなっちゃった。水蒸気はもうちょっと少ないほうがきれいだったかもしれないけど、工場の人たちが、よっしゃ！俺らの工場の技術力をもってして、夜7時にモクモクと水蒸気を出すぞっていう、その美意識が一番美しかったかなと思います。

工場内では一体感が生まれたらしいですよ。その後、この工場は投資家に向けた報告書に、環境に気をつけています、地域社会とも良い関係ですよ、とこのプロジェクトを載せました。地域とのこういうイベントが企業の価値になるということ、ちゃんと位置付けてくれました。

隣の火力発電所からも声がかかった

で、今度はこの工場の隣の火力発電所からも声がかかった。実は煙突がなくなるのです。昨今、電力会社は地域との関係に苦慮しています。ここは火力発電所ですけど煙突が役割を終えて取り壊されることに。人知れず取り壊されるのも寂しいから、何かできないかと、隣の工場のアートプロジェクトを見てずっと思っていたみたいです。その煙突は八戸で一番大きい構造物だった。そのライトアップをやりました。たくさん電気を発電できる発電所で、わざわざ人力で自転車を漕いで、その電気で



やっているのと苦情の対象になる。けれど私たちはこれを愛でましようというプロジェクトをやりました。

価値転換が起って

近くで見たり、ワークショップをやってみたり。カフェをやってタンクに似せたお菓子をお菓子屋さんにつくってもらう。隣にろうそくを添えて、炎が点くタンクみたいなお菓子。工場の方からも説明してもらおうとトークイベントもやりました。そうしたら苦情になりやすいフレアスタックの炎の価値転換が起って、むしろこれは見たいとなった。これはシャッターチャンスだという思考になった。

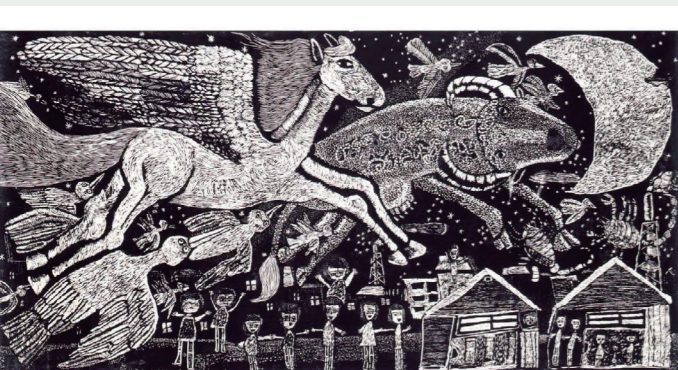
3分だけ投影させるプロジェクト。制服を着ている発電所の職員の人たちと一緒に頑張っている。お金がありませんので電気で演出するのも全部やってもらいました。1分経ったらこの人と交代ね、なんて言って、みんなでライトアップする。これによって、減多にないですけど、市民の方もこの敷地の中にイベントのお客さんとして入れました。

船を運転している漁業の方が実はこれを目印に八戸に帰ってきていたというお話も聞いた。煙突が大事だったのだと感じた。社員の方もそう思った。大煙突が思った以上に愛されていた。知らなかつた。地域の人たちと直接交流ができたので、どういう人のために仕事をするのかという意識が持てたというお話がありました。

中心街に文化施設が集約している

これまで美術館が1回も出てこなかつたですけど、八戸の昔の美術館は、こういったアートプロジェクトのようなことはやっています。今、建て替えをしていますが、絶賛工事中です。敷地に美術館と銀行が建つのですが、本八戸駅から徒歩5分ぐらいの中心街圏内に美術館ができる。市役所の向かいです。近くにはつちがや、八戸ブックセンターがあり、公会堂のホールがあります。映画館、スケート場もあります。中心街に文化施設が集約しているのが八戸の特徴です。

もとの美術館は税務署の建物を使ったもので、市民的には八戸の美術館は税務署だよねっていう気持ちだった。ですから建て替えますといっ



八戸市立湊中学校養護学級生徒共同制作「星空をベガサスと牛が飛んでいく」
『虹の上をとぶ給 総集編II』より (八戸市新美術館建設推進室所蔵、1976)

無名の人たち市民がつくった作品が一番の宝

八戸の美術館の収蔵品で一番有名な絵はモネでもピカソでもゴッホでもございません。八戸の養護学校の生徒たちがつくった教育版画です。映画「魔女の宅急便」の中に出てくる絵のもとになったと言われています。ファンタジーの作品、無名の人たち市民がつくった作品が一番の宝だと私は思っています。そこにヒントがあると思っています。

たら、そんな大きな反対はなかつた。むしろ良かった、やっと税務署がなくなるみたいなのところがあつたようです。

活かす生きる
ミュージアム

八戸市新美術館

- ▼ビジョン
種を蒔き、人を育み、100年後の八戸を創造する美術館
～出会いと学びのアートファーム～
- ▼基本理念
 - ・アートの文脈で「八戸の美」に迫る美術館
 - ・アートが中心にある環境で「八戸の人」を育む美術館
 - ・アートの力を「八戸のまち」に波及させる美術館

八戸（地域性） 人づくり まちづくり

みんなで学び合う場所

新しい美術館は設計でラーニングセンターとしての美術館という提案をされました。美術館は美の殿堂ではなくてみんなで学び合う場所じゃないですかという提案でした。今、八戸の美術館のビジョンは100年後の八戸を創造するために種をまいて人を育てる美術館。出会いと学びのアートの農場みたいなイメージですね。ということの基本理念としても八戸の地域性を大事にする、人づくりを大事にする、まちづくりを大事にする、この三つを大事にする美術館ですというのを基本理念に掲げました。

にわホネホネ団」の西澤です。私は博物館の職員ではなくて、サークルの団長と私が勝手につけた役職ですが。そういった立場で話しさせていただけます。私は千葉県に生まれました。動物が大好きだったので、住んでいたところは街でしたので、生き物はなくて、本の中で愛でていました。動物が漠然と好きだったので、中学校の時に理科の素晴らしい先生に出会って、理科や生物が好きになりました。先生のいた理科室、理科準備室という部屋がもうめちゃくちゃ汚い、ものがいっぱい詰め込まれた部屋で、その雑然とした感じに惚れてしまいました。こういう部屋で一生暮らすにはどうやって人生を送ればいいのかと思うかと思いました。

みんなが博物館関係者

そのうち博物館というものがどうもそれに該当しそうだという感じで、大阪の自然史博物館に2001年に入り込みました。最初はミュージアムショップのアルバイトとして入ったのですが、その後標本をつくるサークルを結成し、それからずっと博物館におります。おかげさまで人生の夢が半分ぐらいいかなくなりました。博物館を動かしている人たちで決して職員だけではなくて、関わるありとあらゆる人のことを博物館関係者というのです。定義があります。日本博物館協会が博物館の原則というものを出版して、博物館関係者の行動規範を発表しています。その中に、こういう人が博物館関係者だよと書いてあります。これを見ると博物館関係者とは設置者を構成するもの、博物館の職員、ボランティア、インター

町を動かす力に アートを加える

ということ、事業の軸も地域性にこだわる。八戸だからできる。八戸の文化DNAを持っているからわかるアート。そういうアートが美術館で展示されると八戸の文化にもいい影響の循環が生まれるのではないかとこの視線に立つ。それから文化と街をつくる人。一緒に育っていきましょう。私も含めてスタッフも含めてみんなが育っていきましょうということ。

そして街を動かす力にアートを加える。先ほどの工場大学みたいに。八戸も産業政策で企業誘致をしています。それと連携しながらアートを、街をつくることへと波及させていく。それが美術館の機能の一つだと捉えています。

従来の美術館の機能、収集保存、展示に加えて人を育てる、街に波及させるアートセンターの機能の三つの機能を持った美術館として準備しています。2021年、来年のうちにオープンできるよう、今まだ工事中という段階です。

青森県に馬と犬を見に行きたいという人が多い。ご存知でしょうか。十和田市現代美術館と青森県立美術館は今年行きたい美術館トップ10に入っています。私たちもそれは知っていますから、八戸は税務署かって気持ちもわかりますよね。八戸に来たお客さんに美術館とかないのと聞かれて、市民は悔しいながら十和田に連れて行っていた人が多かったかもしれません。もしくは国宝の「合掌土偶」がある是川縄文館に連れて行ったりする。他にも安藤忠雄さん建築のレジデンス施設、国際芸術センター青森があり。弘前にもこの春に弘前れんが倉庫

ン等、博物館に関わるすべての者を指すとあります。なので、ここにいる私たちみんなが博物館関係者なのです。博物館を考える時に学芸員さんその他の人ではなく、博物館に関わっていききたい、博物館が好きだなと思ったらみんな博物館の人だと思っていきたいと思います。博物館の私たちは、人類がつくった知と文化の保管庫の博物館をどうやって活かしていけるかをいつも考えています。

廊下にキャビネット二つ

大阪の自然史博物館がどんな博物館かその歴史からご紹介します。1945年からと資料には書いてありますが、開館は1950年。その頃の大阪がどういう状況だったかというと空襲で焼け野原、石造りの建物、市立美術館



美術館がオープンします。

ということ、青森県は現代アートの美術館、美術施設が多いところ。その中でさらに似せてもしょうがない。十和田に任せるものは任せる。大きな展示会をやるなら県美がある、という割り切った立ち位置で、八戸は先ほど言った八戸の人に資する、街に資することにもっと徹底的に取り組もうという意気込みを持った方がいいと思っています。その美術館につながるようなかたちで工場大学も活かしていきたいなと今活動しているところでございます。以上です。

小林

大澤さんありがとうございます。それでは続いて西澤さんにお話しいただきます。一度聞いたらその名を忘れられない「なにわホネホネ団」という団員を率いて大阪を拠点に、東北にも震災後みなさんで支援に来てくださっています「なにわホネホネ団」団長の西澤さんから活動をお聞きします、よろしくお願いたします。

講演2

「市民が育てる博物館—なにわホネホネ団と大阪市立自然史博物館」

こういう部屋で 一生暮らすには

西澤真樹子

よろしくお願いたします。大阪から来ました「な

などがポコッと残っていた状況です。その戦後の大阪の子どもたちに科学教育という声が高まり、博物館をつくって欲しい、つくれという市民の動きがありました。で、49年11月に科学博物館開設準備室が市に設置されました。その翌年の50年に博物館をオープンしました。このオープンがすくなくユニークなのですが、実は建物が建ったわけではなく、市立美術館の廊下にキャビネットを二つ並べて開館宣言をしたのです。建物ではなく展示開設をしたというわけですが、この日を私たちの博物館では開館記念日としています。建物は建たないままに館長と学芸員3名が雇用され、本当の博物館の建物、私たちの建物ができるまでの間、大阪周辺の、時には海外にも出かけて自然環境調査を行い、資料を収集していきました。調査を支えたのが博物館をつくらうと頑張った市民の人たちです。その人たちが博物館を支える会「大阪市立科学博物館後援会」をつくってくださいました。後援会は学芸員と一緒に自然環境調査や標本収集を進めていきました。

学芸員と応援する市民が 博物館のかたちを

それから8年間の間借り時代を経て、やっと建物ができます。廃校になった小学校の一部を改装して、大阪市立科学博物館ができました。その時、後援会の人たちが科学研究会と名称変更して、3人の学芸員と応援する市民が博物館のかたちをつくりました。標本同定会は1951年から69年間毎年続いています。夏休みに海で拾った貝、拾った植物を学芸員さんと後援会のメンバーが見てく

フォーラム 第1部

活かす生きる
ミュージアム

れて、これは何ですとよと名前を教えてください。うちの博物館がすくなく貧乏だったエピソードがあります。博物館って館報、ニュースレターみたいなものを出しますよね。これも自力で出せず、後援会の人たちがお金を出し合っ出したという経緯を聞いています。博物館友の会の会報「Nature Study」は、1955年5月に発刊しました。第1号の巻頭に筒井嘉隆館長が書いています。作家の筒井康隆さんのお父さんですね。「博物館ニュースの発行が急務であることはよくわかってはいたが、なにぶん経費が乏しく、残念ながら見送っていたところ、ご厚意で後援会がニュースの出版費用を出してくださることになって誠に感謝に堪えない」と書いてあります。

タッグを組んで活動する

その頃から友の会がお金を出して発行し編集作業を学芸員さんがする、投稿はどっちもするという形ができあがりました。タッグを組んで活動するのがうちの基本です。標本同定会の71年8月の写真があります。化石、鉱物、岩石、貝、動物と看板に書いてあってその下に専門の人がいて標本を見られる。学芸員さんもぼつぼつ入っていますが、後はみんなアマチュア研究者のボランティアや大学の先生が見ていました。

そして、29年間かかると専用建物がありました。良かった。良かった。74年に長居公園に博物館ができました。博物館を支えてきた後援会と科学研究会が友の会というかたちで名称を変えて一緒に活動することになりました。

大学生が うろろうろするように

2011年に恐竜展とか大きい展示ができた新館ができましたが、そこにミュージアムショップがオープンして、そのアルバイト、データ入力、バイトさんたちに若手の大学生がたくさん入ってきた。館内に学芸員さんでもない大学生がうろろうろするようにあります。その後、2001年の9月に友の会がNPO法人になります。法人格を取って博物館と対等の立場で一緒に事業を行えるような体制をつくった。博物館と協力協定も締結しました。友の会がもともとNPO法人大阪自然史センターがで、大阪市立自然史博物館の事業を盛り上げるために一緒に活動するという協力関係を持っています。

どんどん盛り上がりによって事業が増えて、2009年には他の大阪市内の施設の指定管理者になって事業規模が1億円を超えました。2014年からは認定NPO法人として活動しています。ちなみに私は「ホネホネ団の団長」ですが、この役職では一銭のお金も出ないです。今、私はこの認定NPO法人で職員として働いています。40人ぐらいいますね。

サークル

博物館には取り巻く人たちが、館長、副館長がいて、その下に庶務、管理、学芸課があって、学芸課の中に五つの研究室があります。館長は必ず学芸課から出るといったことが決まっています。研究施設だからそういった方向がわか

しているかというところじゃない昆虫をひたすら瓶から出してポンド、実際にはシエラックという接着剤で紙に貼っていく。それをひたすらずっとやり続けています。一日みんな作業して小さなお弁当ぐらいの箱が一個埋まって、ワーワー喜んで、そういうサークルです。これが若手サークルの最近の動きです。

「賢者の間」

もう一つ、頑張っている年配の方を私たちは賢者と呼んでいます。リタイアした研究者の方々が、いつしか「賢者の間」と呼ばれた部屋で植物標本をひたすら整理されています。大学を退官された先生や、退職された研究者の方などがかなり年上の方が多くて、現職の学芸員さんがこの賢者たちに教える請いに行くこともたくさんあります。賢者は私たちの憧れの存在です。私たちも歳をとったら賢者になって、博物館で標本整理したいなと思っています。

「なにわホネホネ団」はこんな拾いものを標本にして活用につながる博物館応援チーム



る人が必ず館長になるのです。で、資料に「こちゃこちゃ書いてあるのは全部サークルです。これで全部じゃなくて多分1000ぐらいあると思います。例えば「関西トンボ談話会」はトンボのことを調べます。アサギマダラというチョウの渡りを調べる会、きのこを調べる「菌類談話会」や「シダとコケ談話会」。それから長野県まで行って化石の発掘を行う「阪神わかやま野尻湖友の会」。「坂道班」は地形を見ながら歩く会です。それから動物研究室、私はここに入りかかっています。ここにも野鳥を調べる人たちが、「プロジェクトP」といってプラナリアをひたすら調べる人たちもいる。「マダガスカル部」はマダガスカルに行きたいので勉強する人たちのサークルです。

底力をつくっている

今はちよつと活動休止していますけど、「ナウマンズ」はちんどんバンドで、イベントの時にチャリチャリやって盛り上げる。ナウマンズウがうちのシンボルなのでナウマンズです。他にも「読書サークルBooks」、自然史系の本を読んで書評を書いたりしています。博物館をアマチュアや研究者、市民、友の会の会員が取り巻いていて、その底力をつくっているのです。たくさん市民サークルが自然史博物館を利用して、盛り上げているという構造ができています。なんでこんな博物館にサークルがあるのか。それはたぶん博物館の性質によると思いますが、自然史博物館はいろいろな自然を細かく分野に分けて調べていきますので、岩石、動物、鉱物、菌類、植物、藻類などいろいろな研究分野のアプローチの方法があり

「なにわホネホネ団」

私のサークル「なにわホネホネ団」は、動物の遺体から骨と毛皮の剥製をつくるサークルです。2003年に立ち上がりました。博物館って動物の死体をいっばい集めているでしょ。交通事故のタヌキとか冷凍庫に入れるのですけど、その頃は学芸員さん一人でやっていたので、中はもう氷河みたいになっていて。冷凍庫を開けてちよつと隙間があるとそこにイタチをシュッと入れるみたいなの。これを何とかできないかということも自分たちも標本づくりを覚えたいので、サークルをつくりました。ちなみに入団試験があります。タヌキぐらいの中型哺乳類を一人で剥いたら合格。現在400名の団員がいます。誰でも見学ができて参加もできる標本サークルで、年間600名ぐらい延べで参加しています。たぶん世界で一番多いと思っています。



ます。そのためにたくさんの人を集まっています。また、学芸員は一人一つサークルを持って、という初代からの伝統というか、そういう雰囲気もあります。サークルのお世話も業務の一つで、研究の一環なんですね。

フィールドワークをたくさん して標本を集めます

フィールドワークをたくさんして標本を集めますので、博物館の実物標本は毎年、だいたい前年比で3万5,000点ぐらいずつ増えています。平成29年で171万なので、今はもっと増えて200万点ぐらいいっていると思う。ただ野外からきた植物が標本になるわけじゃなくて、誰かがそれを、例えば植物なら押しナンバリングして、そして登録しなきゃいけない。そうするとサークルの人たちは探ること、調べることに、それから標本収集、整理、その全部に関わります。

ポンドガール

いろいろなサークルが標本を絡めてできています。一番最近できたサークルをご紹介します。ハチやハエなど空を飛ぶちっちゃい昆虫を捕まえる方法があります。野外にテントのような布を張り、昆虫がそこを上がって一番上まで行くとアルコール瓶にポチャッと落ちるので、マレーゼトラップといいます。トラップで獲れた小さな昆虫を整理するかっこいい名前のサークルは「ポンドガール アンドボーイ」。2016年に誕生しました。ここでのポンドは木工ポンドでございます。で、何を

道端から海まで

博物館標本をこれまで3,000点以上増やしました。動物や鳥は交通事故に遭ったり、海や川に流れ着くこともあるし、窓ガラスにぶつかって死んじゃうこともあります。それを拾ってきてみんなで整理しています。道端から海まで、海が結構大変、大阪は海があまりなくて、クジラが時々来る。クジラはほしいと思っても捕れないので、天からの贈り物に大喜びで行きます。12月の冬の海でも浸かってみんなで解体します。雨具、カッパを着ているんですけど、前が作業しているとバカバカ開くのでガムテープで貼っていた。「ガムテープ十字軍」って自分たちのことを呼んでいました。ドロドロに腐っていますけど頑張ってやります。

一番優秀なのは小学校6年生 ぐらいの女の子

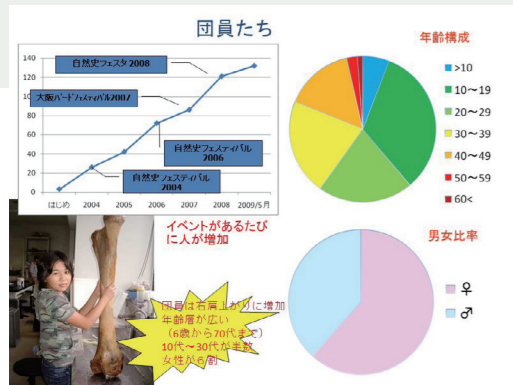
昆虫も標本として1点になるので、哺乳類はものすごく多い。手間がかかりますが、それをみんなで作って楽しんで、博物館の財産を増やすことを私たちの目標にしています。団員の構成メンバーですが、すごく若いサークルです。男女比というところ、女の子が65%ぐらい。男の人が少ない。女の人はこういうのが得意で、平気で8時間とかキャッチャー言いながら標本をつくる。一番優秀なのは小学校6年生ぐらいの女の子から中学生ぐらい。手先が器用で、言ったことをきちんと守って、ものすごくオリエティで標本を仕上げてくれる。獣医学部の男子学生が一番ためでした。失敗するし、

活かす生きる ミュージアム

言うこと聞かないし、寝るし。もう大変ですね。普段は毛皮をつくったり骨を整理したりクリーニングしたり。親子で参加する方も多いです。

「クリスマス皮むきマラソン」

テーマ別作業日には「小小鳥祭り」というスズメより小さい鳥をひたすら剥製にする日とか、合宿じゃないですけど「クリスマス皮むきマラソン」があります。クリスマス頃に3連チャンでやって、最後はパーティーして終わるとか、いろいろやっています。後は組み立てて博物館の特別展に展示。ホネホネ団の成果ですが、何といても標本が激増しました。1994年から2016年までの鳥類、哺乳類の収蔵標本点数の年次変化グラフを見ると、2003年に異常なことが起きているなってわかります。鳥類、哺乳類の担当学芸員さんが就職したのが94年、学芸員さんが鳥の専門家なので、グラフの上が鳥で下が哺乳類で



すけど、鳥を頑張っつくりました。1人で1、000点ぐらい。哺乳類は年間数10点ぐらいずつしか増えないという状況が続くのですけど、2003年にホネホネ団の活動が開始すると71つと上がっていく。今、3、800点ぐらいまで哺乳類が増えた。私が来た頃は430点くらいしかなかったです。大量に増えました。鳥も頑張っています。最初は月に1回活動をして、鳥も哺乳類もやっています。鳥の日を別につくろうということ。月2回にしたらちょっと伸び率が上がりました。

価値転換

さらにホネホネ団はすごく新聞に載る。聖教新聞以外全部載りました。聖教新聞さん早く来てくれと思っています。雑誌にも載ります。名前がたぶんキャッチーなのです。結果的に博物館の名前もセットで売れて、宣伝になります。それから、さつき八戸の価値転換の話がありましたけど、かつては標本つくるのは残酷だとか子どもの残酷心を助長するとか色々言われていました。言われていましたが、私たちが教育的ないい感じで報道されたおかげで、みんなその最初のテキストを踏襲していきます。解剖気持ち悪い残酷だ、から博物館頑張っているよね、標本つくって偉いなって方に転換した。有名になったおかげで全国の死体がどんどん届くようになって、また冷凍庫が氷河化する状況になっています。

博物館楽しいって

子どもたちに聞くと、友達ができて勉強がで

ネタをもっといって応援しよう決めました。名前は「東北遠征団」です。色々なところに行きました。建物がないところでは外に幟を立てて、椅子や机も持って行って、化石のレプリカづくりとか、自分たちの持っている博物館のコンテンツで遊んでもらいました。だんだん現場に合わせて縄文時代の遺跡から出る魚の釣りセットなどオリジナルでつくるようになります。

福島で最初に行ったのはアクアマリンふくしまでした。アクアマリンふくしまは金魚を常設展示しています。「桜プリストル」っていうオリジナル金魚の品種があります。そこで金魚の水槽を見て色塗りをしてストラップをつくろうというのをやりました。で、その次にいわきといえばアンモナイトなので、アンモナイトのレプリカの型をホネホネ団員たちと1、800個ぐらいつくって、それを塗ってもらって持って帰ってもらうのを小学校でやりました。

それから福島市の小鳥の森にも行きました。小鳥の森では屋外の行事がしにくくなっていて、屋内行事で面白いものをできないかと標本作成講座をしました。この時は、うちの博物館でもやっている鳥の手羽先標本づくりをしましたね。あれは1日で骨格標本をつくれ、その上食べて美味しい行事です。みんなで集まって肉取って、お昼にその肉を食べて、午後はそれをクリーニングして台に乗って完成、こんな骨格標本講座をできるように最初は指導者研修をして、次に本番をみなさんにやっていただきます。

南相馬の博物館も同じ状況で屋外に行けなかった。では南相馬の子もたちだったら知っ

きて博物館楽しいって言います。バックヤードから入るのが楽しいみたいです。子どもは。警備員さんにホネホネ団ですか、そうですかとかわかれて入って、白衣着て手袋するとテンションが上がるみたいです。

普段の社会的な立場以外で活躍できる場

まだホネホネ団のいいところがあります。技術的にイマイチ使えない獣医学部の学生をベテランの小学生団員が指導しています。うちでは子どもでも技術力と経験値が高い人は尊敬されて、下手な人はずっと馬鹿にされています。そうすると普段の自分、家の中では子どもで立場は下ですけど、ホネホネに来るとベテラン団員として活躍できるので、みんな尊敬の気持ちを集めて。なんか年齢とか職業とか普段の社会的な立場以外で活躍できる場になればいいと思っています。それと、親と一緒に来て、家族で入団したりもします。子どもの親は30〜40代ぐらい。普段あまり博物館に來ない世代が来るきっかけにもなっています。

私たちはサークルなので平気で行けます

こういうサークルが他にもあるのではと思います。立ち、「ホネホネサミット」というのをやったら1万人以上来ました。国内外から標本をつくる方が出展する文化祭みたいなイベントです。

また、ここに来られない人たちがいるって聞けば、じゃあ、こちらが行こうやないかと。

ていて欲しい植物を7種教えてくださいと学芸員さんをお願いして、消しゴムで葉っぱスタンプをつくって、来た人たちがハンカチをつかって持って帰れるワークショップのキットをつくってお届けしました。

フタバサウルス、福島県博のロゴマークもフタバサウルスですよ。フタバズキリユウの通称で呼ばれていたのが、論文によって記載されてフタバサウルスって正式な名前がちゃんとつきましたというお披露目を兼ねて、実際の大きさを体験してもらうために、みんなで貼り絵をして小学校の図書室の廊下にぶら下げました。今回お配りしている資料の中に「いわきの化石ものしりブック」が入っています。それはこの時につくった冊子です。そこに論文のこと、名前が決まった経緯と、フタバサウルスはずっと昔に発見されたこと、結構研究が進んでいて、今わかっていることなど、いわき市民、福島県民だったら押さえておくポイントが書いてあります。冊子はフタバサウルスを記載した研究者の方に監修してもらってつくりました。あちこちでそんなことこんなことをいっばいやっていきます。

博物館も社会も

元気にできる

最後にまとめますけれど、博物館を市民が使い倒したら、大阪の場合、市民の力で標本がものすごく増えます。それも買わずに、拾ったり採集してきてそれを整理して増えるのです。博物館の周りの自然に詳しい人がどっさり集まり、結果的に大阪の自然史の情報がどんどん蓄積して研究成果が上がりります。

大阪府には自然史博物館はなく、大阪市立自然史博物館一つだけです。その学芸員が大阪全部を回るわけにいかない。でも私たちはサークルなので平気で行けます。例えば入院している子どもたちのところにも、ホネだったら消毒殺菌できるので、アルコールぶっかけて動物のホネを持って行って授業をしたりしました。団員たちはアイデアにあふれているので色々なことを言います。本を出そうとかお祭りをやろうとか。うちはやりたいことを実現する装置として機能しています。ホネホネサミットのように突拍子もない案でも、実績をつくと博物館もなんかいい感じかなということ。巻き込まれていきます。

心を痛めました

震災の時、みんなものすごく心を痛めました。すごくショックを受けました。自分が行ったことのある博物館がたくさんあったし、標本をつくって100年後、200年後の未来に残すって言っている人たちの標本がなくなっちゃったかと思っ心配しました。そこで何をしたらかという、学芸員さんと役割分担して、どういう形で応援ができるかという会議を3月の末ぐらいにみんなでしました。学芸員さんは標本レスキューをする。昆虫標本とか壊れたものがあつたら直す活動を学芸員さんがやる。

「東北遠征団」

私たちは事態が落ちてきたら絶対に教育が必要になるから、博物館の普及教育活動の

普及教育のコンテンツが増えます。さっきの手羽先講座は私たちが骨で行事ができなかなとつくり出した行事です。応援団の市民が元になってきた友の会の法人化によって、学芸員、庶務の人たちだけでなく立場で博物館で働く人が増えました。博物館を拠点に生きる人たちが増えたということ。です。

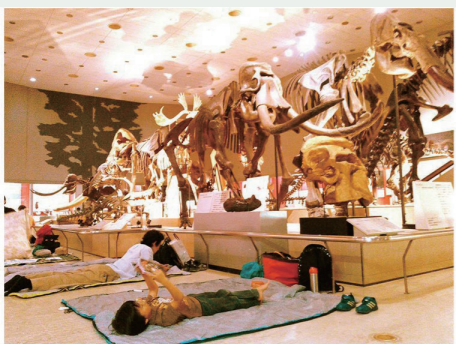
芸術とか医療とか他の分野と連携できます。博物館と連携したい人を見つめる目が増えて、うまく連携すれば、その成果を博物館に返すことができます。ピンチの時には地域を越えて助け合えます。館種とか地域とか大阪にこだわっているわけではなく、博物館が好きな人たちはどこでも活動したいのです。

私は本当に博物館が大好きで、楽しんでいますが、そういう市民の楽しみとか活躍が循環すると博物館も社会も元気にできるなと思っています。

夢を叶える箱

最後に私の大好きな写真を1枚見せて終わります。私が博物館で絶対やりたかったこと、恐竜の展示室で寝たいと思っ、ナイトミュージアムをやりたいと思っいたら、実際に友の会の人気行事になった行事の様子です。

ミュージアムってどういう場所かなと考えた時、私たちの夢を叶える箱だっと思っました。施設はよく箱物と言われますけど、箱でええやないかと思っっています。夢を叶える箱であつたらいい。これは博物館でぜひやるべきだということ。をどどんん持ち込んで、私たちが箱を



ミュージアムはわたしたちの夢を叶える箱 あつたらいいなも やるべきだ！も持ち込んでどどんん育てていきましょう！

活かす生きる
ミュージアム

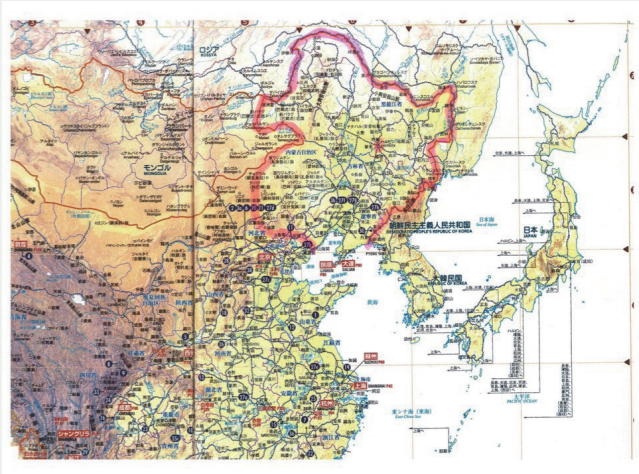
市民手作りの 民間運営の記念館

寺沢秀文

みなさんこんにちは。ご紹介いただきました長野県にありますが満蒙開拓平和記念館という長い名前の記念館の活動についてお話をさせていただけだと思います。今お話しされたお二人とはまたちよつと違いますが、場違いな感じがしています。私どもの記念館は大変小さな記念館で博物館法にもとづく博物館にも該当しないような市民手作りの民間運営の記念館です。私も一応館長と名乗っておりますけどボランティアの非常勤館長でありましてあまりこういったところでお話しする立場ではないのですが、私どもの記念館で伝えている満蒙開拓とはどんなことなのか、それも含めて少しお話しさせていただきます。

語られることのなかった

私どもの活動している満蒙開拓平和記念館は今から7年前にできました。民間運営の小さな記念館です。ここで伝えていること、それは満蒙開拓あるいは満州開拓とも言います。中には詳しい方もいらっしゃるかもしれませんが、あまり戦後語られることのなかった、知られていない歴史でした。みなさんの中にも満州とか満蒙開拓という言葉聞いたことはあるけ



れども実際それがどんなものであったか詳しく知っている方は少ないと思うのです。時間の都合もありますので、端折らせていただきますが、満蒙開拓がどんな歴史だったのか簡単に話したいと思います。

幻の国と言われる満州国

みなさんの資料の中にも私が講演する時のレジュメをタイトルだけ変えて入れてあります。私の講演は90分がスタンダードで、それを今日は20分でお話ししなきゃいけない。後でまたその資料を見ていただければと思います。

満州国という国が現在の中国の東北地方に1932年昭和7年に日本が中心となって、一応独立国として建国されます。1945年



までたった13年間だけ存在した。それが幻の国と言われる満州国です。そこに全国各地から約27万人というたくさんの方々が渡って行くことになりました。満州国では「五族協和」といって、日本人をリーダーとして五つの主な民族が仲良く力を合わせて理想の国を作るといったのが一応のスローガンでした。実際には日本が支配する半植民地的な、そして民族差別もある、そういった場所であったと言われております。一応独立国だったので国旗も作られている。

私どもの記念館に展示してある満州国の地図(開拓団入植図)には沢山の黒い点々があります。それは日本から渡っていったたくさんの方々の開拓団の位置です。全国から約27万人という開拓団が渡りました。基本的には一般開

人間の盾

日本からは関東軍、日本軍が(満州に)入っていきました。しかし広大な満州ですからとてもカバーできない。そこで民間人主体の開拓団を張り付けることによって、北のソ連に対するいわば「人間の盾」、「人間の防波堤」とすることを目的として送り込まれたと言われています。満州国の南側が朝鮮半島です。北の方が当時敵対をしていたソ連との国境、ソ満国境です。実は開拓団が日本から入って行った場所は満州全体の中でも北寄り、北のソ連との国境寄りの危険な地域にたくさん送り込まれています。先ほど言ったように北のソ連に対する人間の盾、防波堤として送り込まれていったことがよく分かる。しかも戦争が負けるにしたがって後の時期になるほど北に、北にと送り込まれていった。

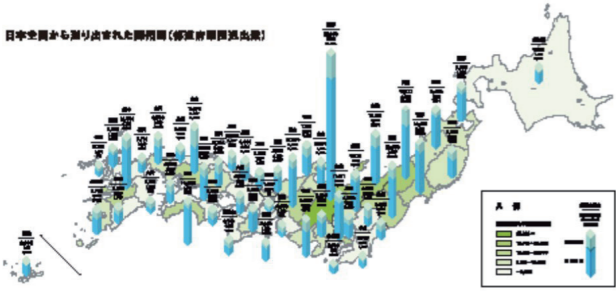
たくさんの方々の少年たちも

開拓団は大きくは二つに分類されます。家族で渡っていくような一般開拓団が約27万人の開拓団のうち約7割を占めます。あとの3割は満蒙開拓青少年義勇軍といまして、わずか満14歳から17歳の少年たちを集めて、その少年たちだけを短い訓練で満州へ、いわば少年兵として送り込んでいく少年たちです。当然学校年齢ですから学校の先生がその募集にあたることになりました。記念館にも展示してありますが、ポスターが貼り出され、どの学校からは何人を青少年義勇軍として出さないという割当表が県からきました。当時の

この福島県からも

拓団といまして、家族で揃って渡っていった。私の家族も実は元満蒙開拓団員でございます。一番上の兄は現地で生まれておりますけれども、残念ながら終戦の年の冬を越せずに1歳で、現地で命を落としております。全国すべての都道府県から開拓団員が行っております。その中で圧倒的に多いのが私どもの記念館がある長野県です。もともとなった表をみなさんの資料の中に入れておきました。

全国から渡っていった開拓団ですが、開拓団員が多かった順に並べたものを見ていただきますと、長野県が圧倒的に多い、2番目に多かったのが山形県です。そしてみなさん



んの福島県も実は全国で4番目という多さで1万2、673人も多くの開拓団をこの福島県からも送り出していることをぜひ知っていただけたらと思います。ではなぜ満蒙開拓団が満州に送り込まれていったのか。主には農業移民としてみなさん渡っていくのですが、南米のブラジルとかあいつた移民と満蒙開拓はかなり趣が違います。「移民」と言っているのは実態には移民的な性格が乏しい。それがなぜ送り込まれたかと言うと、大きくは三つの理由があったと言われています。

一つ目は、満州という国は実質的に日本の半植民地ですから、その支配をしていくためにはそこに住む日本人の比率を高める必要がある。そのためにはそこに住む開拓団を置くことがいだろうと。

二つ目は、あまり言い方が良くないかもしれませんが、「日本国内からの人減らし」がございました。当時の日本は大変子沢山で、実は私の父親も開拓団員でしたが農家の8人兄弟の三男坊でした。長野県は分けて与えるような畑が少ない。山ばかりの地形ですから、分けてもらえる農地がない次男、三男坊が満州に行けば二十町歩、二十町歩はだいたい東京ドーム4個分の広さ、そういった農地がもらえるので渡っていった。

そして三つ目、これが一番大きな理由だったと言われていますが、満州という場所を北にいた当時のソ連(ソビエト連邦)が奪おうとしているというわけです。満州を奪われると朝鮮半島伝いに日本に攻め込まれて危ないというので、満州を護衛することは当時の日本にとって国家の一大事だったので。



ことです。学校の先生がたもこのノルマを果たすために一所懸命にならざるを得なかった。そういったことでたくさんの少年たちも渡っていた。

集合開拓団

先ほど言ったようにこの福島県からも約1万2,000人というたくさんの開拓団員が渡っていらっしゃいます。みなさんの資料の中に入れておきましたが、この福島県から行った1万2,000人のうち約4,000人は集合開拓団といまして、例えばある村は人口が多いから、そこから一部の人たちを現地に弟分の村を作って、そこに何とか分村という村を作って、住まわせる。こうした分村といった形で送られていった分村、分郷開拓団は私が調べてみただけでも12の開拓団が福島県から満州に送り込まれています。

この会津からも行っています

開拓団所在地の満州の地図（入植図）を見ますと「福島村」という福島県の名前をつけた村、あるいは白河から行った開拓団のみなさんの「白河郷」という開拓団が行っている。この会津からも行っています。例えば興安東省には会津地方から集められて渡っていった「会津村開拓団」が入っています。その開拓団の慰霊碑がみなさん「存知かどうか、会津若松の市内にもございます。昨日、私ここに着きまして、最初に向かったのがこの小田山忠霊堂です。その敷地の中に慰霊碑がある。それは会津村

弄されたのがこの満蒙開拓という歴史です。

そういった施設がなくてはいけない

私どもの記念館は7年前にできました。満蒙開拓について特化した記念館はそれまで全国どこにもありませんでした。先ほどの青少年義勇軍だけの小さな施設は茨城県にありましたが、こういう施設は全国どこにもなかった。しかし多くの犠牲を出した歴史として私たちはそこから学ばなくてはならない。そういった施設がなくてはいけない。その思いに至ったのが今から10年以上前です。開拓団は特に長野県が多かったのですが、中でも私どもの記念館がある飯田市周辺の地域が一番多く出している。全国で一番多くの開拓団を送り出したこの地域にこそ記念館を作ろうということでした。私が「言い出しっぺ」だったものから、当初は事務局長として活動しました。満蒙開拓は国策として行われた事業ですから、まずは国立か県立で作って欲しいと活動しましたけれど、残念ながらなかなか取り合っていただけ、結果として民間の活動として取り組まざるを得なかった。途中からようやく行政の支援をいただけるようになり、敷地として地元のア智村が村有地を無償で貸与してくれることになりました。記念館ができあがったのが足掛け8年を経たことでございました。

すべて市民が手作り

作る前には「そんなものを作っても人なん

開拓団の慰霊碑です。殉難者の氏名も刻まれています。時間がありましたら詣でていただければうれしいです。

こうして全国からたくさんの開拓団が渡っていききました。そしてたくさんの犠牲を出しています。福島県から行った集合開拓団だけを見ても、おおむね半分の方が現地で亡くなり、あるいはいわゆる残留孤児、残留邦人として残されています。日本に帰ることができたのは半分です。開拓団、満蒙開拓の歴史は最後の局面で大変多くの被害を出したわけですね。

そこにはもう家も畑もありました

私の両親も開拓団員として現地に渡りました。父親が開拓団員として満州に渡った時、「開拓」ですから現地で荒野や原野を切り開いて開拓するのかなと思っただけで、そこにはもう家も畑もありました。それが何を意味するかお分かりかと思いますが。満蒙開拓と言いますが、実際にはあそこにもともと住んでいた中国人や朝鮮人の家や畑を非常に安い値段で買い上げ、そこにいた人々を外に出し、あるいは日本人の小作人、使用人として使った。そういった形で日本人の開拓団が入ったのがかなりを占めます。当然現地の中国人の人たちは日本人の開拓団のことを内心では恨んでいた。その結果として最後の局面で、開拓団は中国人の人々に襲われる。それには背景があったわけですね。

被害と加害の両面に

か来ないよ」とずいぶん言われました。私はそんなことはないと思っただけですが、しかしいろいろと言われるものだから、最初の事業計画では年間の来館者予測を5,000人ぐらいにしてみました。幸いなことに開館しましたら、初年度は3万人、それから現段階でも年平均2万7,000人ぐらいの方が訪れております。おかげさまで何とか維持していますが、当然記念館は民間運営です。当然スタッフも少ないですし、運営費も入館料だけが頼りですので、学芸員もおいていません。展示もガイドもすべて市民が手作りです。展示もよく言えば手作りの記念館です。私たちの思いでは、満蒙開拓という難しい歴史を分かりやすく同じ市民目線でみなさんに伝えることが大切だと思っております。ですから記念館の展示もボランティアや職員がやっている展示ガイドもなるべく分かりやすさを心掛けています。

未来に向けて教訓を活かす

私どもの記念館が大切にしている中国の有名な言葉、故事があります。「前事不忘、後事之師」（過去を忘れず未来への教訓とする）という言葉です。戦争という大きな犠牲を払った中で私たちがしなければいけないこと、それはなぜそういったことが起きてしまったのかをしっかりと学び、未来に向けて教訓を活かす、それが私たちに与えられた使命だと思っております。

「おかしいものはおかしい」と感じる感性

向き合って

私どもの記念館では満蒙開拓団のみなさんの当時の思い、夢とか希望、最後の場面での多くの犠牲、そうした日本人側の被害についても語り継いでいきます。けれども同時に現地の人々に対する加害という面、その被害と加害の両面に向き合っていかなければまた同じ犠牲を出し、歴史を繰り返してしまふ。その思いから私どもは記念館を作りました。

日本に帰っても行く場所がない

満蒙開拓団の人々は多くの犠牲を出して半分の方が亡くなり、半分の方がどうにか日本に帰ってくる。日本に帰ってきてからも大変な苦難が待ち受けています。もともと分けしてもらえないような農地がなくて渡った方々です。生きて日本に帰っても行く場所がない。戦後日本政府は「緊急開拓事業」と言って新しい開拓地を作れといっています。しかし日本はもともと開拓する余地なんかないとどこですから、みんな僻地に入って再び開拓を繰り返します。

長野県からもたくさんの開拓団が（満州に）渡って、その中で（日本に）帰ってきた人たちも行く場所がありません。一部の人たちは再び長野県を離れて全国各地の開拓地に入っていくわけですね。福島県にも長野県からそういった方々が入っています。そしてその場所からまた原発事故によって立ち退かざるを得なくなった。「国策により何回も翻弄された」とその方々はおっしゃっておられました。国策に翻

満蒙開拓は国策で行われましたが、記念館の近くにある阿南町、当時は大下条村といいますが、その村長であった佐々木忠綱という方は「自分で現地に視察に行き、あれは本当の開拓ではない、日本人が行くべき場所ではない」と言っ、ずっと満蒙開拓を出すことに反対しました。当時のことです。それから従わない国賊、非国民と言われて村内外から責められたそうです。しかし村長は最後まで信念を曲げず、大下条村から公式には一切開拓団を送り出さなかった。その結果、その村からは戦争が終わってみれば満蒙開拓での犠牲者が少なかった。もちろん国策にはいい国策もありますが、満蒙開拓のように多くの犠牲を出した国策もあつた。たとえ国策であつたとしても「おかしいものはおかしい」と感じる感性を持つた賢い国民であるために過去の歴史に学ばなければいけない。それが私ども記念館の務めであると思っております。

「平和の種まき」

小さな記念館ですが、年間2万7,000人ぐらいが訪れる。今から3年前に天皇皇后両陛下も「来館されました。その時にも記念館の中で賛否両論がありました。たくさんの方々がお越しいただく中で私どもが満蒙開拓の歴史を通じて伝えたいこと、それは「平和の種まき」であると思っております。二度と悲しい犠牲者が出るような世の中にすることがないように満蒙開拓の歴史から多くの方々に学んで欲しい。特に若いみなさんに知ってもらいたい。

私自身にもある思いがあります。記念館が

活かす生きる ニュージウム

フォーラム 第1部

できるよりもかなり以前のことですが、あるアジアの青年たちと交流する機会がございました。最後の晩、一緒にお酒を飲みながら話をしている時に隣に座ったあるアジアの青年がポツリと私に言いました。「やっぱり日本人は信用できない。それはかつて私たちの国を侵略したからではなくて、今の日本人はかつて日本が何をしたかを知ろうとしないからだ」と。そう言われた時には背筋が寒くなる思いがいたしました。私たちは責任世代の大人として、若い人たち、子どもたちに日本の美しさ、四季の美しさとか文化の素晴らしさを教えていかなければいけません。同時に日本という国がアジアの中で約150年間をどのように過ごしてきたかもしっかりと伝えていかなければいけないと思っております。

今、当記念館では約40人の方がボランティアとして活動をしてきています。大変ありがたいことに高校生たちが記念館でボランティアとして展示ガイドの活動を始めています。地元の高校生たちが定期的に記念館に来て展示ガイドをしてもらっている。私たちもこうして次の語り手、新しい語り手を少しずつ育てていくことができている。

社会や世の中は変えていくことができる

当記念館では現在約10名の開拓団員の方に「語り部」として語っていただいておりますが、みなさん高齢化でどんどんいなくなっています。語り部の方の生の声を聞いた私たちが高校生たちのような次の新たな世代の語り



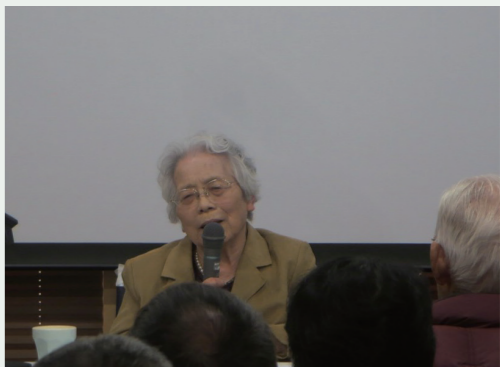
部がこの記念館を通じて、平和に向けての多くの発信をして欲しい、それが私どもの記念館の願いです。

私どもが記念館の活動を通じていつも心掛けていること、それは「事実を先に知ったものの社会的責任、それは次の人に伝えることである」と思っています。いろいろな経過で、それに気づいた人、知った人、その人が先に立って他の人に伝えていく。そのことの繰り返しで社会や世の中は変えていくことができる。私たちは思っています。それを信じたいと思っています。

ぜひ機会がありましたら、不便なところですが、ぜひ満蒙開拓平和記念館にぜひご来館いただきたいと思えます。早口で聞きづらかったと思いますが、私からは終わらせていただきます。ありがとうございました。

ただただすごいなと思ってお二人の話を聞いていました。ホネホネ団は今八戸が新美術館の準備をする中で一つの理想。市民がどう関わるのか、私たちもアートプロジェクトをやる中で一緒にやる人、運営する人、見る人といういろいろな市民の関りを広げていきたいと考えている中で、もつとすごいのだったという衝撃。メンバーの年齢もさまざまだし専門性も必要だと思えます。解剖なんて私はできない。それは学芸員の方とかもししたら獣医師の方がやることだと思ひ込んでいます。登録メンバーが400人もいて、延べ600人の方が一緒にやっています。その専門性を市民の方と共有して一緒に活動しているというのは、博物館、美術館の常識をかなり打ち破っていると思えます。でももししたらそんなに高い壁じゃないかもしれない。思ひ込んでいる部分もあつたりするのかな。見直すべきところがあるなと思ひました。

記念館については、おっしゃっていたように自分たちの負の歴史、本当はちゃんと見なきゃいけないものを見せるべき役割をミュージアムが持っている。本当にそうだなと思ひついでいます。八戸でももちろん公害の歴史もあつたわけですから、そこをさておいてということではなくて、きちんと目を見開いて、捉えた上で私たちはどういう町に生きて、それを糧にこれからどういう生き方をしていかなきゃいけないのか。私も工場を扱っていて示唆を与えてくれることですし、それを高校生が説明しているのは日本の未来捨てたものじゃない。私もそういうふうに通んでいかなきゃいけないと、兜の緒を締めるような気持ちになりました。西澤さんどうぞ。



小林
寺沢さんありがとうございました。ここからはみなさんとディスカッションしていきます。会場準備で少し休憩いたします。

ディスカッション
事務局・川延安直

気が付きましたか、みなさん苗字に沢がつきます。ザワザワ心が波立っております。とても素晴らしいお話でした。残りの時間でもう一度3人の方の言葉を振り返ってみてほしいです。大澤さんの話でも印象的だったのが、「愛でる」「字び合う」という言葉を使っていたらよかった。普通はプロジェクトに参加する、やる、見る、ですけれど愛でるっていう言葉だと思います。そこに参加する人の人格

私たち人間がより良く生きるために

西澤

ありがとうございます。褒めていただいて。魚が料理できたら、包丁を使えば大丈夫です。「ミュージアムは誰のもの」というタイトルを頭に浮かべながら聞いていました。私たち人間がより良く生きるためにいろいろな時間軸で考えさせてくれるところだと思ひました。八戸は私も工場の佇まいが大好きでひそかにファンです。今までたいしたことない普段のものが価値をとまなつて、その土地に生きる人たちが元気になるということもあるし、自分たちがどこから来て何をしてきたのかちゃんと捉えて恥ずかしくない人間になれるために昔のことを知る場所でもある。私の寿命もだいたい決まっています、いつか死ぬのですけど、ずっと前後の人間のしてきたこと、人の関わってきた歴史に触れられる場所だという感想を持ちました。貴重な学びがいろいろな時間軸でできる、そして価値も生まれてくる場所だと思ひます。

集まった人たちが交錯する場所

寺沢

まず今日はこういう学びの機会を与えていただいたことに県立博物館に御礼申し上げます。お二人の話を聞いてあらためて思ったのは本当に幅広い活動、我々とまた違うきちん

みたいなものが伺えるし、後はラーニングセンターですか。学び合う場所ですごく大事だと思います。

西澤さん、さすが大阪人はちゃうなと思ひました。もう敵わないです。すべての言葉が印象的だったのですが、まずは「賢者の間」に入れるかどうか、そういう歳になってきているので、考えていきたい。小学生のホネホネ団に入った動機で「友達ができてうれしい」というのがあるとおっしゃった。そこも素晴らしいと思ひました。解剖ができて楽しいとか動物を見て楽しいとかじゃなくて、友達ができてうれしいと言ってくれる場にミュージアムがなっているって素晴らしいです。

そして、構成メンバーがすごくバランスが取れている。ほぼ全部均等じゃないですか、赤ちゃんとか低年齢は別にして、10代20代30代が均等で、女性がちよい多い。素晴らしいバランスです。理想的だなと思ひました。

寺沢さんのお話はその事実がとてつもなく重いことなので、まずそれを民間で取り組もうとなさったモチベーションにとて頭が下がります。おかしいことはおかしいと言感性。おかしいことをおかしいと言わなきゃいけない義務とかではなくて、感性とおっしゃったのに心を惹かれました。ありがとうございます。

これで終わっちゃっていいぐらいですけど、3人の方からエール、お尋ねしたいことがあると思ひます。まず大澤さんどうぞ。

常識をかなり打ち破っている

大澤

と向き合った活動をされている。やはり人との触れ合いということをあらためて思ひます。記念館を作る時に思ひましたが、どうしても博物館は「箱物」と言われがちです。しかし単なる「箱物」ではなくて、情報を持って、思いを持って、集まった人たちが交錯する場所としての拠点はあらためて必要だと思ひます。多様な人たちが集まり活動し、交流し合う拠点、場所としての博物館、記念館も同じでしょうけど、その重要性をお二人のお話を聞きながら再認識させていただきました。

川延
ありがとうございます。みなさんお互いに意見交換ができたところですが、その上でお尋ねになりたいことがありますか。

学芸員さんと市民の間みたいなの

西澤
私たちのサークルはどうして上手くいっているのかとよく聞かれます。学芸員さんと市民の間みたいな人がいるのが上手くいっているポイントかなと思ひています。例えば私は博物館でアルバイトやいろいろなかたちで仕事をしつつ、サークルの団長もしつつ、学芸員さんとも仲がいいという間にいます。味方をたくさん増やすために、こういう立ち位置の人がいると上手くいくと感じる時はございませんか。いろいろな館の例が聞きたいと思ひます。

みんなとクリエイティブな

ことをするのは好き

大澤

確かにそれは大事。私の立ち位置も一応職員、学芸員ですが、市役所の中でアートのことを専門でやろうと思つと学芸員という肩書きしかない。私はアートコーディネーターかなと思ひています。私は特に産業の専門家ではないし、もともと工場が好きでもなかった。私が工場好きだから始めたわけではなくて、たまたま工場が好きなの上司がいて、その人が工場のことをぜひやりたいと言つて、その流れで私が企画を作つたのです。私は工場のことに対しては二ユートラルで、特に詳しくもないけど、好きでもないけど、みんなとクリエイティブなことをするのは好き。でも私だけでは成り立たない。そこにはやっぱり一緒にやる熱量を持つ市民の人がいて、それに動かされる企業の人がいるという相互作用が起きてくる。色がオセロのようにだんだん変わっていくというか、そういう人の関わり合いを作り、結節点みたいな人が必要だとやつていて思ひます。

川延

そうですね、コーディネーターって必要性はあるけど職業として固まっていけないという感じはあります。でも学芸員は好きでなくても何とかする。そういう性分の職業かなと思ひます。それにしてもやっぱり熱量がないとだめじゃないですか。弱いのがその熱量だったりするけど、その辺、満蒙の記念館の場合まず熱量からスタートしている。そもそもの熱量の発生源はどんなところから熱くなつてき

活かす生きる
ミュージアム

たのでしょうか。

気がついた人が動かなければ

寺沢

どこでも同じだと思うのですが、やはり何かに気がついて何かを知ったら、本当はそのことはもっと多くの人に知ってもらわなきゃいけない、みんな考えて考えなきゃいけない。そういうことに気がついた人が動かなければいけないと思ふのです。

満蒙開拓にしても向き合うことが難しい不都合な歴史として、戦争が終わった後も授業の中とかで余り触れられていない歴史です。では、学ぶ価値のない歴史かといえばそうではなく、本当は重要な歴史であってそこから未来の平和に向けて学ぶべきたくさんさんの教訓がある。それは私もやっていてあらためて痛感した。多くの人たちに知ってもらうためには気がついた人がやらなくてはいけない。誰かがやってくればいいなと思っても、結局は誰もやっていないっていうことは多い。だったら気がついた自分たちがまずやらなくてはいい。

人の心の痛みを知るきっかけに

かつて満蒙開拓は本当にマイナーなテーマで、私も「変わり者」だと言われたことはありますけれど、記念館を作ったと思うのは、結果として高校生や多くのおみなさんが関わってくれ

て、平和の尊さ、人権、人の心の痛みを知るきっかけになる。そういう場所になっていると思ふとつくって良かったと今思っています。ですから大層なことをやったという気持ちも全然ないやらなくちゃいけない当然のことをやったというくらいしか思っていないので、熱量と言われても、そんなに熱量があったかなと自分でも躊躇するような思っています。すいません、答えになっていない。申し訳ありません。

西澤

そこに高校生が関わったりして、さらに熱量が注がれている状態なのじゃないかと聞いていて思いました。

寺沢

それは思いますね。若いみなさんが関わってくれることは本当に素晴らしい。今の若い人たちが冷めているとか言いますが、そんなことはなくて、若者たちに語り掛けていけば本当に瑞々しい感性でちゃんと受け止めてくれる。記念館にはたくさんさんの若い人たちが来てくれて、修学旅行も来てくれます。その方々がメッセージルームでメッセージを残してくれる。本当にしっかり見てくれていて、日本の未来も若者も捨てたものじゃないとあらためて思うので、若者たちが取り組んでくれているという状況は非常にうれしいです。

人の心に留まらなかったから

西澤

気仙沼のリアス・アーク美術館は震災展示を

でいる人たちが幸せになるための政策として位置づけようという意向が強いんです。私もその時の上司によってはもっと人が来ればいいと言われ、もうちょっと観光政策としてやったほうがいいと望まれているのかなと思う時間ももちろんあります。それよりもまずは八戸に住んでいる人たちが自分の住んでいる町のことを知って、誇りに思っていて、新しい人と出会って、それで町が活性化する、人の出会いの中で町が活性化していく状態を作る。そして八戸に住んで良かったというところを作っていく、そのためにアートを活用するという志向が強いと思っています。そんなことを言ったって人口は減っていくし、若い人も劇団とか大学でやっていても就職が東京に決まっちゃう。そういうことも現実にはある。彼らを引きとめる手立てまでいっていない残念さもあります。けれども、ここに住んで、もう八戸でいいやっていうのではなくて八戸に住んで私は良かった、ここで最後まで生きたいというところに深く関わる活動、そこに本当に深く関わっていけるようなことはやりたいなと思っています。

川延

手段は美術だけじゃないですよ。いろいろあるけどミュージアムもアートも役割を果たせると思っています。団長いかがでしょうか。

西澤

大都市です。大阪だから、大きいからできるのでしょって思ったところのあなた、実はそんなこともなくて、今何とかホネホネ団がいっぱい日本中にあります。土佐ホネホネ団とか讃岐

大事にされています。その学芸員の方も過去の歴史、その土地に住んでいる人のDNA、文化がちゃんとインストールされ、人の心に留まらなかったから起きた人災の部分もあつたとお話をされていました。被災した部分、津波がきた部分は開拓した戦後の経済発展の中で埋め立てたような場所だった。もって昔の町の暮らし方、ここには集落を作ったけど、ここには作っていなかったということを見ていくと本当は学べたことがあつた。だけど経済発展の中で目をつむってしまった。博物館、美術館がこういうことをみんなの心に響く形で活動してこなければいけなかったとおっしゃっていました。日本人として生きる、この地域に生きるものとして本当に必要なこと、未来を作っていくために必要なことに関心を持ってもらうために博物館、美術館が何を提供しているのかはこれからすごく大事な気がしています。みなさんどんな心持ちで関わっていらっしやいますか。

人間が後から追いかけてくる

自然史博物館はお二人が活動されている場所とちょっと違って、今必要かどうかよく分からなくてもやるところです。美術館が美術作品を収蔵するのと同じように石とか鳥とかいっぱい集めていますけど、そういった自然の証拠を残していくと、いつか人間の理解が追いつく。例えばDNAとか知らなかったし、方法もなかったし、遺伝情報で生き物の姿を追えるということも後から付いてきた技術です。人間が後から追いかけてくると想定して、モノ

ホネホネ団とか飯田ホネホネ団もあります。

町医者みたいな感じで

そこでは数人規模でサークルが展開されていて、大阪に見に来て面白かった人が地域にそれを持って帰ってもう勝手にポコポコ立ち上げています。そういう人たちを集めて話したくてサミットをやりました。地域に博物館があるっていいですよ。国立科学博物館に行けば立派だし、かつこいし、専門家がたくさんいて、不思議だなと思ったことがたくさん解決するんですけど、要するにあれば大病院です。なんか不思議だなと思った時に行くのはすごくエネルギーがいる。でも地域に自然史博物館があつたら全部解決しないかもしれないけど、町医者みたいな感じでちょっと調子悪いから行くみたいに、ちょっと不思議だと思つたから行くっていう感じで、ここで何とか解決できる、あるいは解決するために寄り添ってくれる人がいる。そういう安心な病院がたくさんある、そういう感じが地域の博物館だと思つています。遠くに行かなくても聞ける人が近くにいる文化を市民が持っているといろいろな情報があると思つています。かかりつけ医ですね。

川延

かかりつけ医ですね。病院って生活必需品。体調、心の不調も含めて具合の悪い時に行ける場所。同じように頭の中がモヤモヤしてしょうがない時にかかりつけ博物館があればいいですね。その安心感ですよ。

活かす生きる ミュージアム

Xファイル

西澤

すごく好きなエピソードが二つあります。一つが遠野市立博物館です。あそこには、ウチに妖怪が出たんですけど、あの妖怪は何ですかと質問がくる。それがXファイルに纏じられているそうです。遠野には不思議なことを聞ける場所があるっていう感じを持ちますよね。素敵だと思ふ。

うちにもケセラパンパセラはどうやって飼つたらいいですかって電話があつて、みんな大喜びでいろいろな研究室に電話を回していた。白粉を食べると聞きましたけど、白粉の成分は何ですかとか。植物かどうか分からないので、いろいろなところに話がいく。そういうちょっとしたことを聞けるのがいい。すごいチャラチャラの高校生カッパルが来て、昆虫の学芸員さんに「あのー聞きたいことがあるんすよ」とかって言う。で、何かって傍で聞いていたら「カブトムシどこで捕るんすか」って。めっちゃ素敵だと思つた。こういうところであつて欲しい。

だから体の調子が悪くなった時には病院ですけど、そういうモヤモヤ、何だろうなと思ふを解決してくれる場所として存在できたらいいと思つています。

川延

そうですね。阿智村の高校生はチャラチャラしてなくて真面目でイケメン。その高校生ボランティアに説明してもらつてるとすぐ隣で高齢のおばあさんたちが熱心にご覧に

なっていた。あの方たちは体験者なのですか。

寺沢

元開拓団員の方です。

川延

時間が交差している感じが満蒙の場合には強くありました。全部地域の方ですね。

この地域であるからこそ

寺沢

当記念館もなにしる辺鄙な場所で、地域の中で運営していくしかないのです、語り部にしても遠くからお呼びしたいけど多くは地元の方です。今の地域とお話で私が思ったのは、記念館にしても博物館にしても地域とともになければ成り立っていかないということ。私どもの話で申し訳ないですが、記念館を作る時に「人がおらんような田舎にそんな記念館を作ったって、人は来ないよ」と言われました。全国で唯一の満蒙開拓に特化した記念館を作るなら、もつと人が大勢いる都会で作ればいいじゃないかと結構言われた。

でもその時に私が思ったのは、大切なことはそのことに思いを持つ人がいかに大勢いるかということ。そういった人がいる場所のほう成り立つ上で大事。不幸にして全国で一番多くの満蒙開拓団を送り出したこの地域であるからこそ全国で唯一の記念館ができた。だからこそ今お話があったような元開拓団員の方が、かなり少なくなっていますけど、今でも生活をされていて、記念館にお話に来てくださり、その話を地元の高校生がまた聞いてくれる。

本当に地域に密着した記念館だなと思っています。

いつかまた自分の子どもたちを連れて

ただ高校生についてもちょっと不安なところがあるのは、地方はどこも同じかもしれないが、どんどん若い人がいなくなっちゃ。私どものところでも卒業した高校生の7割は県外に出て行っちゃ。彼らももしかしたら大学とか出て行ってしまっ、帰ってきてくれればいいけど帰ってきてくれないかもしれない。

でもやっぱり大事なことは若い頃にそういうことを学んだ、知ったことがこの場所に出ていってきつとどこかに残っていて、都会に暮らしてもいつかまた自分の子どもたちを連れて学びに来てくれる。そういう形で広がっていくとあらためて思います。本当に地域の中でこそ成り立つ記念館だとあらためて思っております。

川延

ありがとうございます。もう時間がなくなっちゃって。まだいろいろお尋ねしたいことがあるのですが、震災後ずっとこの博物館も福島の復興に関わり続けてきていると自負しています。でもなかなか結果は見えないです。福島が面白い、私が八戸も大阪も長野も面白いと思うように、他の方が福島いいねと思ってくれるようになるのが最終的な復興だと思います。そのためにこの博物館も微力ながら頑張っているつもりです。最後にみなさまからアド

バイス、指南をいただけたらうれしいです。お願いいたします。

大澤

個人的なエピソードです。私は名古屋出身ですけど、高校の修学旅行が会津若松でした。それ以来で昨日の夜来しました。懐かしいと思っ、て駅からホテルまで歩きました。友達と喜多方ラーメン食べようとドキドキしながら入ったなとそういうことを思い出してきた。大人になって来てみると、また見たいもの知りたものも変わってくる。

震災には日本にとって考えるべきものがたくさんある。それを博物館としても大事にされている。福島という場所は日本にとってなければいけない場所。福島をどういうふうに必要なとしていかなきゃいけないのか、このライフミュージアムネットワークや博物館が先導役になってやられている。青森ももちろん被災していますし原発を抱えている。それは青森も同じで、そういうものをどういうふうに分かたが本場に必要とするものにしていくか。そういう活動、アクティビティをしていかなきゃいけない。もちろん研究して書物にしていくことも大事だけれど、やっぱり市民と地域と一緒にやっていく活動が大事じゃないかと思えます。

川延

ありがとうございます。西澤さんお願いします。

見続けて向き合い続けて

もいらつしゃると思うので、佐々木先生から一言いただければと思います。お願いできますでしょうか。

世界基準です

佐々木雅幸

佐々木です。午後の講演でミュージアムは国際的にどういうふうな考えられてきているかをご紹介したいと思っています。ミュージアムはスペースであって建物ではないという印象的なフレーズがあります。人々が社会をより良くし、社会から排除されている人たちを包摂し、あるいはいろいろな立場にある人たちの声に耳を傾け、そして対話が起る、そういう場所であるという定義を変えましょうという議論が行われています。まさに今日のみなさんの実践活動はそれに沿っている。世界基準です。どうもありがとうございます。

川延

時間ですけれど、会場からご質問いただければと思います。

参加者A

大変刺激的なお話ありがとうございます。大変励みを含めたコメントです。八戸のアートが工場と結びつくのはもったないことで、アート、テクノロジは語源が同じ。テクノはギリシャ語でテクノロジ。アートはたぶんラテン語でしようけど同じものです。もちろんテクノロジは医療や産業に使われるけど、もともとはアートと一緒にです。ダヴィンチを見ても分かります。そういうことで素晴らしい試み

活かす生きる ミュージアム

だと思えます。

最近大林組の社長大林剛郎さんが『都市は文化（アート）でよみがえる』という集英社新書を出しました。非常に素晴らしい見識を持った財界人です。2番目の大阪の博物館は非常に歴史が長い。歴史が長いといっても日本はそういうものがなかった。だいたい自然科学は西洋のものでですけど、どこへ行ってもちょっとした町には自然史博物館がある。子どもをそこに連れていく教育の場になっている。重要どころです。いろいろなところに博物館が素晴らしい発展しています。日本の国立博物館はそれに向かっているのでしょうか、地方でもぜひ進めていただきたいと思えます。ミュージアムは実はアミューズメントです。楽しみの場であると定義されました。まさにそのまま実行されていると思えます。

最後の満蒙開拓団の話。実は私は満州で生まれています。満蒙開拓団ではないですが、技術屋として親が行ってそこで生まれました。残留孤児になるところだった。そういうことで非常に興味深かった。最近ではテレビで満蒙開拓団の話も出てきました。最後におっしゃったメッセージは事実を伝えるということ、これは非常に大事なことです。今の政権を見ても分かるように国家の実態、事実を明らかにしていくことはとても大事。ぜひ頑張ってくださいたいと思います。以上です。

参加者B

東京から来ました。実家が白河なので。面白いなと思って聞いていました。大澤さんは一人だけ公務員で、企画とか責任とか自己の実現性みたいなものが背景にないと、これだけ

痛みを忘れることが ないように

寺沢

すでにお二人に言い尽くしていただいたと思いますが、あらためてお話があった通り、私たちの満蒙開拓にしても、そして一緒に比較してはいけないかもしれませんが震災、原発にしても、向き合うことが難しい歴史、出来事だったと思います。でも天災はともかく人災、戦争とか満蒙開拓、原発、そういった人が関わったことで大きな犠牲を出してしまった歴史を忘れてはいけません。それはマイナス、負の遺産かもしれない。だからこそその遺産から学んで、二度と繰り返すことがないように、そのために備えができるよう、正の遺産というかプラスの財産に置き換えていく英知が私たちには求められていると思うのです。向き合いにくい。ことでも、誰かがやっていたいかなければいけない。物事はその痛みを忘れた時から次の痛みへと走りだす。痛みを忘れることがないように、記憶を語り継いでいくために、先に立って進めていく場所、拠点が必ず必要だと思うのです。この県立博物館もぜひそういう意味でも活動していったらいいと思います。大事なことは横の連携だと思います。情報交換し刺激しあって、こうしたことを続けていくことがとても大切だと思います。こうした機会を設けていただいたことにあらためて御礼申し上げます。本当にありがとうございます。

川延

どうもありがとうございます。ほぼ時間になってしまいました。午前中だけ参加の方

西澤

どうしよう。指南なんてできないです。震災後に岩手も宮城も福島のいわきにも行きましました。その学芸員さんたちともよくお話をしました。福島県立博物館、あるいは福島だけが起きてしまったことに対して向き合い続けている。絶対になかったこと、辛かったからもう離れようってしないで、ちゃんと見続けて向き合い続けている。それはすごく苦しいことだけど、そうしているのは福島だけだと言った学芸員さんが岩手の方ですけど、いらしたうちは全然できていないって言うていた。そのことをドーンと受け止めています。満蒙開拓記念館も、開拓の歴史もそうですけど、見なかつたほうが楽なことってたくさんあると思う。それを博物館が絶対手放さない、ちゃんと向き合い続けるという姿勢を見せ続けていることにすごく意味を感じました。

やっぱり入って自分たちのことを真剣に考えているかどうかすぐ分かる。市民も。ここは私たちのために考えているとずっと市民が感じていることが大事だと思っています。しんどいと思うけど、そういう博物館があつて欲しい。私たちもいつ何が起きるか分からないですけど、何かあつた時にしんどくてもこういうふうに取り組み続けられるのだというモデルとしてぜひ頑張りたいと思います。尊敬しています。

川延

ありがとうございます。なんか賢者の間に入れるように頑張りたいと思います。寺沢さんよろしくお願いします。

熱量を持ってやれないと思う。何かあるのかな。こういうものでSDGsなんかまとめていたら面白いと思った。

西澤さんですけど、子どもたちがいっぱい集まってきたのが面白いですね。障がいを持った子どもたちや学校に行けない発達障害の子どもたち不登校の子どもたちも参加できるのかな。そういう子どもたちも学校には行けないけど自然史博物館なら行けるよ、楽しいよってなると面白いと思いました。

寺沢さんは、歴史というものを考えないとこれからの日本は大変だということですけど、私の友達が満蒙開拓の舞台を作っていますので、何か協力していきたくないなと思いました。高校生の参加ですけど、はじめから来るわけではないので、何か仕掛けみたいなものがあつたのでしょうか。一言聞かせていただければと思います。

語り掛けていくこと

寺沢

記念館に平和授業で来ていただいたことあります。私たちが各高校などにお伺いしています。そこで私たちがいつも訴えかけていくけど、他人事ではなくて自分ごと、あなたのおじいちゃん、おばあちゃん、関係者がいるかもしれないし、もしかしたら時代が変われば君自身が青少年義勇隊員として満州に渡っていたかもしれないから。なぜそんなことになつてしまったのか、君たちがこれからの時代でも戦争になつた時にどう考えるのかと一緒に考えることを掲げていく中で、記念館に来て、

ボランティアとして展示ガイドをやったりして、高校生たちが参加してくれるようになってきた。語り掛けていくことが大事だとあらためて今思っています。

友達いないなつていう子もいっぱいいる

西澤

子どもたちのこと質問ありがとうございます。もちろんいます。明らかにクラスから浮いて誰も友達いないなつていう子もいっぱいいる。団のいいところはですね、そういうことを言わなくてもいいのですよ。自分が学校に行けているか、行けていないか、勉強が得意か不得意か、そんなことを言わなくても活躍できるのがいなと思つています。障がいのある方に関しては視覚の方は来られたことがないですけど、来られたら来られたなりにカスタマイズして、道具これ使つたらいいという提案をしたらそれはそれで活躍していた。来られるという、特にわざわざそういうメッセージは出していませんけど来られています。

専門家が

役所の中にいることで

大澤

私が公務員にちゃんとなったのは2年前なのですが、もともと私はアートの仕事をしています。そういう専門性のある人を役所の職員として採る仕組みを持ったのが八戸の政策の

小林

ありがとうございます。午前部の部終了いたします。午後は1時半から第2部をスタートします。佐々木雅幸先生に地域の文化創造拠点としてのミュージアムの可能性についてお聞きします。佐々木先生にご講演いただいた後、赤坂館長と対談を行います。午後もお集まりいただければ幸いです。それでは最後にあらためまして3人に大きな拍手をお願いいたします。ありがとうございます。

部分。最初に紹介した八戸のブックセンターは非常勤という契約の形態が違いますが、東京の大手書店を辞めて、八戸のここで働ききたくらい熱量のある専門家がいます。専門家が役所の中にあることで普通の公務員の人たちも変わってきます。はつちを経験して次にうちの部署に来るとい文化を渡り歩く一般職員も出てきている。わざわざ説明しなくてもアーティストってほしいこういう感じよねって、もう上司が言っています。だいぶやりやすくなった。10年ぐらい経つとそういうことが起きてくるかな。

川延

八戸はそれが10年後に大きな財産になりますね。

参加者C

私はこの県博で長年学芸員として働いていました。今日は新しい姿の博物館のお話しありがとうございます。勉強になりました。私も学芸員をやっていたので、学芸員がどういふふうにあるべきかを考えていたので。

従来古いタイプの博物館では学芸員さんが専門性を持って自然とか歴史とか研究して、そういうものを活かして一般の人たちに情報提供、新しい学術的な成果を公表していく。そういうパターン。この学芸員のあり方も今日のお話でだいぶ変わってきているのかなという印象を受けました。ホネホネ団の西澤さん、大阪市立自然史博物館はかなりのグループがあつて、そこから資料の収集、研究でだいぶ成果を出しています。そうすると学芸員というのはその中でどういう役割を果たしている

のだろうか。ひよつとしたらもう学芸員はいらないのではないか。あるいはコーディネーターとしての役割が大きいのかと感じました。西澤さんにホネホネ団での経験から学芸員が本当に役に立っているのかどうか、その辺の素直な感想をお聞きしたいと思いました。

西澤

めちゃくちゃ役に立っていますよ。大丈夫です。今おっしゃっていただいたようにコーディネーターとしての役割はこれからもすごく求められると思うんですけど、高い専門性のある人の話を聞きたいのですよ、みんな。ちゃんとした本物の話を聞きたいので、その役割として学芸員さんが必ずそこにいて、その周りに好きな専門性のある人が取り巻いているという状況がずっと続いたらいいと思います。そうじゃないと集まってきた人たちがどういう研究成果を出しているか判断する人がいなくなっちゃう。ジャッジするとかじゃなくて、それはすごい価値があるよって言うてくれる人がいる。いろんな分野にすることが大事だと思うので、学芸員さんはいってください。もっと増えていいと思います。

参加者C

ありがとうございます。安心しました。

川延

ありがとうございます。安心しました。だいぶ時間も過ぎてしまいました。長い時間お付き合いました。ありがとうございます。これで司会を返します。最後にみなさんに盛大な拍手をいただきます。



活かす生きる
ミュージアム

フォーラム 第1部



日時：1月18日(土) 10:00~15:00

会場：福島県立博物館 講堂

2部(13:30~15:00)

講演4「地域の文化創造拠点としてのミュージアムの可能性」

講師：佐々木雅幸氏(文化庁地域文化創生本部主任研究官/大阪市立大学名誉教授)

対談「活かす・生きるミュージアム」

講師：佐々木雅幸氏

赤坂憲雄(福島県立博物館長/ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員長)

司会：小林めぐみ(福島県立博物館学芸員/ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局)

小林
ライフミュージアムネットワーク2019フォーラム、「活かす・生きるミュージアム」ミュージアムは誰のもの。ミュージアムは全ての人のもの」というテーマで午前中にお話を聞きました。午後は文化庁地域文化創生本部主任研究官をされ、大阪市立大学など多数の大学で教鞭を取ってこられた佐々木雅幸先生にお越しいただきました。佐々木先生、どうぞよろしくお願いたします。

講演4 「地域の文化創造拠点としてのミュージアムの可能性」

佐々木雅幸

こんにちは。佐々木です。文字がいっぱい出てくるので、眠いかもしれないけど、お付き合いください。赤坂さんにタイトルをいただいたので、ミュージアムについて喋りますが、実は私はミュージアムを主題にしゃべったことはなくて、一回だけ全国のミュージアムの館長さんの研修会で、文科省から呼び出されて喋ったことがあるぐらいです。本来はクリエイティブシティ、創造都市の話が多いので、なんとかしてミュージアムの問題を解こうと、自分なりに整理しておこうと思ってスライドを用意しています。

公衆に開かれたノンプロフィットの常設機関「permanent institution」批判的な対話のための民主化を促す包摂的で様々な声に耳を傾ける空間

「ミュージアムとコレクシヨンの保存活用、その多様性と社会における役割に関する報告」を出した。この報告がICOMの総会にも当然影響を与えています。これからの社会は創造社会、想像力を刺激するそういう場所、スペースを作らなければいけない。それを産業化し雇用を生み出すということ。そういったことが世界の大きなテーマになるよとユネスコが言っています。そして、文化産業、創造産業の発展のために過去の遺産を活用する。これがユネスコ側からも出ています。

もつと社会と関わる

OECDという経済発展を考える国際機関とICOMが共同で発表している「ミュージアムと地方自治体の相互の発展に関するガイドライン」というのがある。ミュージアムがこれから地方自治体とそ地域の経済的社会的発展のためにどういう役割を果たし、どうしたらいいかを議論した。これまでミュージアムは単体として役割があると言われてきたのですが、もうここきて、環境は大きく変わってきている。もつと社会と関わる。博物館は創造社会の中でどういう役割を積極的に果たしていくか。

**都市をミュージアムと
言い換えてもいい**

創造社会は私からすれば、創造都市と創造農村から構成される社会。別の角度から私が研究している都市についての議論を紹介します。従来どういうふうに都市を捉えているかといますと、ルイス・マンフォードというアメリカの

活かす生きる
ミュージアム

**人間の尊厳と社会正義、
全世界の平等と地球全体の
幸福に寄与することを
目的とする**

ミュージアムは営利を目的としない。ミュージアムは開かれた透明性のある存在であり人間の尊厳と社会正義、全世界の平等と地球全体の幸福に寄与することを目的とする。そのための多様なコミュニティと積極的に連携しながら収集、保存、研究、説明、展示を行い、世界の理解を向上させるための活動を行う。

**今の博物館法は
改正しなくちゃいけない**

これが満場一致では採決されなかった。まだ検討中で採択を来年に持ち越しました。これまでの定義に比べるとかなり違うものなので、慎重に議論をやりましょうということになっています。もしこの再定義が通りますと、多分日本の今の博物館法は改正しなくちゃいけない、というぐらいのインパクトがあります。両方の英語が載せてありますので、英語で確認をしても良かったら良いですが、まずスペースという言葉を使っています。つまり場所、空間です。こういうた討論を行う場所、空間であるということなんです。

**polyphonic spaces
様々な声に耳を傾ける**

so that 'democratising, inclusive and

この表現は常設の機関であるというものに対してかなり違います、スペースであると言っている。

これがこれまでの定義です。で、昨年臨時総会で提案された定義はかなり変わったものになっています。あとで英語もお見せしますがちょっと読んでみますと、

ミュージアムとは過去と未来についての批判的な対話のための民主化を促す包摂的で様々な声に耳を傾ける空間である。ミュージアムは現在起こっている紛争や課題を認識し、それらを考察しつつ、社会のために託された資料や標本を保管し、未来の世代のために多様な記憶を保全し、すべての人々に遺産に対する平等なアクセスを保証する。

昨秋に日本で初めて「International Council of Museums」ICOMの会議が行われました。4600人ぐらいが京都に集まって約1週間議論が行われました。もちろん関心がある方は「承知だと思えますが、ミュージアムの定義を見直そう」という案が議論されました。ICOMにおけるミュージアムの定義は2007年にこのように定義されました。

彼の「知的生産の技術」という本がありますが、知的生産の場は私なりに書くことと創造の場、ということになる。そこから私の創造都市論を紹介していきたく思います。私は創造都市の研究を25年ぐらい続けていて何冊かの本を書きました。本を書くだけじゃなくて、日本の国内で創造都市という考え方で都市再生のお手伝いをさせていた。代表的な仕事は岩波現代文庫にあっていますが、「創造都市への挑戦」という本、オリジナルは20年前に発表して改訂を重ねています。

非常に分かりやすく説明する時は、今日、川延さんがざわついてきましたねってところから語り始めましたが、ざわざわと騒々しくなるのが創造都市論。市民一人一人が創造的に働き、暮らし、活動する都市ですと説明しています。そこには必ずクリエイティブな場所があると思っています。

AIを使い倒すぐらいの創造性を

大阪の話があったので。大阪でしか通用しないダジャレを一つ。市長一人が騒々しいのは創造都市ではない。大阪の人はすぐ分かる。誰かはいませんか。政府は今どういうふうな現代社会を捉えているか。「ソサエティ5.0」って書いてください。3年ほど前に科学技術基本会議がこれからの社会がどうなるかということ、「ソサエティ5.0」をアップした。1.0から順番に、狩猟社会、農耕社会、工業社会、4.0が情報社会、つい最近まで情報社会という言葉が使われていたんですが、もうそれははるかに越

えてAIとビックデータが一般化してもっと進む。それが「ソサエティ5.0」。例えば自動車の自動運転が一般化すれば免許証はなくなる。人間が運転するより機械が運転したほうが安全。そういうことが「ソサエティ5.0」。一方で「ソサエティ5.0」になりますと、今ある仕事の49%が日本社会では失われるという報告書が出ています。定型の仕事でAIに任せたいほうがいい仕事は49%ある。そうすると残りの50%の仕事は分け与えるふうになるかというところ。新しいもって創造的な仕事が生まれるはず。それにはAIを使い倒すぐらいの創造性を持った人が登場しないと。そこで今クリエイティブ・ブルドレン、子どもの頃から創造性を伸ばそう、コンピュターに親しむだけじゃなくて、もっとアーティストックな能力も伸ばしましょうということになっていきます。

私なりに「ソサエティ5.0」を考えると、AIとかビックデータという科学技術が社会を開くというよりはむしろそれを使い倒すような創造的で人間的な社会、それを創造社会と呼ぶことができるのではないかと。工業社会は20世紀型の社会のことで、これから本格的に創造社会に移っていく。一時的には大きなトラブルが発生する可能性もあるけれど、とにかく社会の構造が大きく変わっていく。ものづくり、流通、情報の流し方、これもすべて変わっていくはず。都市や農村のあり方も、これは詳しくは言いませんが、昔の本を読んでもらえればいいです。ともかく大きな変化が生まれようとしている。

衰退していく工業都市を劇的に再生させた

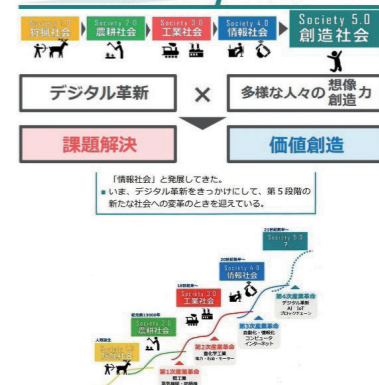
MACBA

アートに溢れている中にまた新しいものを作る流れがあります。バルセロナ現代美術館MACBA、モダンアートセンター・オブ・バルセロナです。最先端のアートセンターを衰退地域の真ん中に作った。そして、近くの公園にはパブリックアートとしてボテロの猫の作品を置く。コロンビアのアートイストです。バルセロナは地中海のスペイン語圏における世界都市ですから南米からたくさんの方が訪れている。そこでどう再生をやるかというところ。美術館の周辺に多文化共生の場を作る。あるいは美術館の中にフロアを作ってそこでざわざわと討論を起す。先ほどポリフォニックスペースという言葉を説明しましたが、きっとそういうことを考えたのだらうなと思いました。

国際文化経済学会が1998年にここで行われた。そこで発表したのが印象的に憶えているのですが、後になって、さっきのミュージアムの再定義など言われていたのはこういうこと。これを指したのかと思いましたが。バルセロナは今オーバーツーリズムで困っています。日本では京都や金沢が困っています。ツーリストが多すぎて、市民の生活の質が下がっている。だからアートで都市を再生すればすべてOKかというそんなことはない。また次々新しい問題が出てきます。バルセロナは新規のホテルの出店と建設を差し止めています。そして、まだ観光客が訪れないところに誘導するという都市計画上の手立てをしています。

このように新しいタイプの美術館が生まれたことが一つの創造都市の誕生に結びつく。

Society 5.0



工業社会から創造社会へ

	工業社会	創造社会
生産システム	大規模生産 トップダウン	フレキシブル生産 ボトムアップ
消費システム	非個人的大量消費	個性的文化的消費
流通・メディア	大量流通 マスメディア	ネットワーク ソーシャルメディア
優位性	資産・土地・エネルギー	クリエイティブ人材 知恵知識・文化芸術
都市の形	産業都市・食料基地	創造都市・創造農村
ツーリズム	マストゥリズム	クリエイティブツーリズム

創造社会はいきなり2020年2030年から始まるというよりはもう既に20世紀の終わりから21世紀の初頭にかけて徐々に広がっています。象徴的な一つのシーンにミュージアムがある。

スペインのビルバオに登場したグッゲンハイムミュージアム、1997年の秋にオープンしました。特に現代建築では記念碑的な作品と呼ばれ、それがビルバオという衰退していく工業都市を劇的に再生させた。そのソーシャルインパクトの面でも大変に話題になった。フランケグーリーという建築家が設計して、チタンを加工して作った独特なもの。ビルバオはかつて造船業で栄えていた。造船所があったネルビオン川の川沿いにできました。衰退の象徴であったところが現代アート美術館ができた。ビルバオは船を作っていたので潜水艦と船みたいな形にも見える。鉄の船からチタンの船、アートの船、そういうフレージが使われておりました。この美術館一つで世界から多くのビジターが訪れたのみならず雇用の形が変わった。古いブルーカラーの仕事ではなくてICTワーカーが増えてきた。ナレッジワーカーと言ってもいいです。そういう人たちが増えている。という形でソーシャルインパクト。ソーシャルエコノミティンパクトと言ってもいいですが、これが現代アートミュージアムによって生まれる。このことは創造都市という言葉に具体性を与えました。それから同じくスペインのバルセロナ、バルセロナは日本人も好きなのでよく行かれると思いますが、私も何度か訪れました。バルセロナと言えばピカソ、ミロの美術館があり、そしてガウディの印象的な建物がある。アートに溢れている。

多文化共生の場を作る

テートモダン クリエイティブロンドン政策

ロンドンではテートモダンが話題になっています。もとは火力発電所です。テムズ川の南のサザークという衰退地域、工場、倉庫がずつと並んでいて、観光客はそこまですりません。そこに大きな火力発電所があったけどもう今は使っていない。イギリスの国立美術館テート・ギャラリーの収蔵作品がいっぱいになって、新しい作品をどうしようかという時にこれを美術館にしようということになった。セントランスの手前にタービンがある。ガランとしたスペースに現代アート作品が並んでいる。このテートモダンが、ミレニアム2000年の前にオープンして、そして、ロンドンの人たちが面白いと思って殺到した。それまでやっぱりイギリスはフランスやイタリアに比べてアートと無関係に思われていたけど、急激にアート、クリエイティブに関心が向かうようになりました。

このロンドンの取り組みがクリエイティブロンドン政策に結びつき、ロンドンオリンピックが成功した。2012年にロンドンオリンピックが行われ、スポーツと文化が融合したカルチャーオリンピックが行われて、アートプロジェクトが170万件イギリス全土で行われ、アーツカウンシル・イングランドがその主導権を握るといふ機会がありました。イギリスにおける創造都市はロンドン、バーミンガム、スコットランドのグラスゴー、エディンバラでも始まっています。友人の研究者であるイギリスのチャールズ・ランドリー、アメリカではリチャード・フロリダがクリエイティブシティという言葉を書き本にしている。アジアでは私が本を書いて普及

させています。私は英語にはしなかったですが、ハングルで出ましたし、中国語訳も進んでいます。

クリエイティブミリユール

簡単に説明しますと、イギリス人のチャールズ・ランドリー、彼は洗濯屋ラウンドリーじゃなくてランドリーですが、彼が考えた創造都市とはどういうものか。セレンディピティという言葉があります。セレンディップの王子さまたちが集まって大騒ぎする。集まってざわざわしているうちに思いがけない新しい発想が生まれてくる状態がセレンディピティ。それをクリエイティブミリユールと説明しました。ここではクリエイティブスペースという言葉は使っていません。スペースとミリユールは微妙に違いがありまして、ミリユールはどちらかというとフランス語的な響きがあって、空間的な場所に加えて雰囲気まで入ってきます。だから、創造都市論ではクリエイティブミリユールという言葉をよく使います。

それから、この考え方に影響されてイギリス政府がクリエイティブインダストリーという言葉を作った。従来の文化産業に加えて新しい創造的なメディアアート、漫画、アニメなど日本のメディア芸術祭がやっているようなものまで新産業として新しく伸ばそうという創造産業政策が生まれました。この流れの先にロンドンオリンピックの成功がある。で、私も東京オリンピックを前にして文化庁で文化プログラムを日本全国でやって再生に向かいます。復興五輪です。から当然東北でもそういう流れに乗るよう努力したのです。なかなか難しいですね日本では。障害物が多すぎて考えているようにはいきません。



ビルバオ 現代美術館による都市再生

グッゲンハイム・ミュージアム・ビルバオ(1997年10月18日)
 フランク・ゲーリー 設計 現代建築の記念碑的作品

明確な都市再生戦略(商工会議所)
 重工業(造船業)都市からの環境再生
 Knowledge ← Culture ← Arts
 20%ほどあった失業率が8%程度に回復
 経済波及効果の大きさ ← 建設費1億ユーロ
 5年間で515万人の入館者、
 GDPは6億5,530万ユーロ、
 直接雇用で4,100人、税収で1億1,750万ユーロ



クリエイトイブソサエティ

アメリカのリチャード・フロリダという研究者がいますが、よく間違われる。この人はフロリダ生まれじゃない。お父さんはイタリア系移民です。フロリダさんは大学で教えるのもいいけど、もっとクリエイトイブな仕事をしたいと考えた人です。先ほどクリエイトイブソサエティが間もなく登場するよと言いましたが、実はアメリカは既にクリエイトイブソサエティに近づいている。20世紀100年間のアメリカ社会の就業構成を見ると、農業就業、製造業就業者に對してサービス業の就業が増えています。1965年の時点でアメリカは製造業よりサービス業が増えている。サービス経済化と言います。よく見るとサービス業の中でクリエイトイブな仕事が増えている。クリエイトイブな仕事は主に2種類あってクリエイトイブのコアの部分、アートあるいはコンピュータ関係、研究開発などの部分とそれを応援するようなマーケティング、広告など専門職種を合わせるアメリカ社会はすでに就業者の3割はクリエイトイブな仕事に就いている。クリエイトイブな仕事がないと地域や都市は発展しなくなる。

タレント、テクノロジ、トレランス

彼はピッツバーグにいたのです。ピッツバーグとかデトロイトは衰退地域です。ここで彼はこれからの社会には3Tが大事だと言った。タレント、テクノロジ、トレランス。地域にハイトクの人、さまざまなテクノロジが集まっても、それだけじゃ発展しない。トレランスは

寛容性と訳します。よく調べていくとクリエイトイブな社会はゲイ、レズビアンの人たちを受け止める寛容性が高い。ゲイ、レズビアンが集まる場所にハイトクの人たちも集まるという連関性があると彼が言い出した。で、それで一躍、フロリダの説は流行りました。その流行ったポイントにある町はサンフランシスコです。サンフランシスコの湾岸、下っていくとシリコンバレーとの間に今をときめくGAF Aの本部がある。そこに世界中からクリエイトイブな人たちが集まって、新しい産業技術を生み出している。サンフランシスコはアメリカで最初にゲイ同士の結婚を認めた。アメリカ社会の中でゲイ指数が高い街は実はアーティストが多い街だと言ってもいい。そこでですね、ハイトクとアート、ハイトクとゲイ、こういったものが一つの注目すべき社会指標になっていく。

クリエイトイブシティ ネットワーク

そうこうしているうちにユネスコではクリエイトイブシティという新しい都市の在り方に注目し、それはこれからの社会にとって意味があることで、世界に向けてクリエイトイブシティネットワークを作りましょうと2004年から提唱しています。現在は246都市が入っています。日本では山形が頑張っていますよ。山形市も鶴岡市も入っている。それから北海道でも札幌と旭川が入った。大阪は入っていない。けど、神戸、丹波篠山が入っています。私は日本の創造都市のほとんどのところで応援しています、一緒にユネスコに行ったりして認定を応援してきました。この話も時間があればたっぷり話

すが先を急ぎます。現在はとにかくヨーロッパに一つの大きな塊があり、アジアでも日本、中国、韓国は大変熱心に創造性によって都市再生に取り組んでいる。ユネスコと連携しています。

世界の流れに共振

ユネスコは国連の機関ですので、最近SDGsに文化政策からアプローチしようということになってきています。博物館もどのようにSDGsに関わるのか当然ですが議論されている。冒頭に言ったようにインクルーシブ、ポリフォニックという言葉と地球環境問題は関わりがある。そこまでお話しすると午前中の議論はまさにその新しいミュージアム定義を先取りしてきたと私は思います。どんどんこれまでの古い定義を乗り越えて、そして世界の流れに共振、共鳴していると思っています。ついにお話しするとUNCTADという主に途上国経済について報告書を出している機関もクリエイトイブエコノミーを提唱している。今月末、世界銀行のプロジェクトで創造都市の研修グループとして60人ぐらいの途上国のエキスパートが日本にやってきます。日本で創造都市の研修をしたいということでもたまたま京都に来るというので私もお付き合いしました。もう先進国だけじゃなくて途上国でもそういった流れが強いです。

カルチュラル・ダイバーシティ

一つ代表的な創造都市をアメリカで上げるとしたらサンタフェがあります。サンタフェの何がすごいかというとニューメキシコの砂漠の中

オペラを一緒にやる

それから様々な社会セクターではCo-operaという、オペラを一緒にやるって言葉があります。これがoperating協同組合です。日本では協同組合というと、オペラを一緒にやるっていう意味が弱いですが、協同組合は実はオペラと一緒にやるという意味です。演劇協同組合、文化協同組合とか様々な協同組合が生まれています。

金沢から創造都市の実験を

21世紀に入ってから日本でも創造都市の社会実験を始めました。私は1985年から2000年まで金沢大学にいたので金沢から創造都市の実験を始めました。そのあと、2004年以降には横浜、神戸、札幌と広がりました。いろいろな街で文化と創造産業による都市再生が行われて、現在は創造都市ネットワーク日本に全国で114の自治体加わっています。福島県でも喜多方市、いわき市、白河市、伊達市が入っていたというところまできました。金沢の創造都市事業の中で私が実際関わったケースについてちょっとだけお話をさせていただきます。

「天下の書府」

金沢は独特の文化のある街です。伝統文化の基層に江戸時代に加賀前田藩が築いた文化資本があった、その上に近代以降も次々と文化施設、文化資本が順番に重なっていきました。それが現在の金沢文化を形成している。江戸時代の前田藩、おそらく日新館など会津藩も相当な文化

ポロニーヤ

の小さい4万人と5万人の間ぐらいの街だけれども、たくさん美術館、大学があり、そしてアーティストがいてアートマーケットがある。そのパワーはものすごい。それだけではなくて、アメリカって若い国だけど原住民は長い歴史が、アメリカ大陸の中でメキシコ、ニューメキシコの辺りは都として長い歴史がある。だからネイティブアメリカンのヘリテージを大事にしている。スペインの影響があるのでスペインの影響もちゃんと博物館、ミュージアムに残っている。20世紀になるとメキシコの影響もある。つまりエプロインディアンとスペインとメキシコ、そして現在のアメリカそれぞれのミュージアムがある。つまり、文化遺産を保存しており、それぞれ重層性があり、ユネスコの創造都市にアメリカで最初に加盟した。ユネスコの創造都市で何を大きなテーマにしたかといえば、カルチュラル・ダイバーシティ、文化の多様性です。白人だけの文化であるとか、あるいは「日本は2000年来一つの民族である」という誤った考え方を取らないで、多文化、文化多様性の先端を行っている。ここでクリエイトイブツーリズムというツーリストが長期滞在しながら一緒にクリエイトイブな体験をするという新たなツーリズムを提案しています。それはすごく素敵だと思っただけですが、1ヶ月滞在しても200ぐらいのコースを体験できて、ホテルのコンシェルジュが全部セットしてくれます。ミュージアムと大学とアーティストとホテル業界が連携しながらクリエイトイブ体験を提供するということをやろうとしている。

私はイタリアのポロニーヤに20年前留学していましたが、この都市はこれからの創造都市の一つの在り方だろうと思って、ポロニーヤのことについて本を書きましたら、亡くなった井上ひさしさんが読んでくれて、自分も行きたいというので、ポロニーヤの関係者を紹介しましたら、彼が帰国して書いたのが「ポロニーヤ紀行」です。当然井上さんのほうが文章うまいですから彼の本はよく売れる。でも、私もおかげで井上さん効果があって売れ続けています。この街には学生主体の大学がある。それが素晴らしい。こんなことを喋っているとミュージアムの話に行かないですね。

街全体が美術館

文化景観という言葉があります。ポロニーヤは街並み全体をミュージアムとして残そうとしています。ポロニーヤにある建物、壁の中の歴史的市街地を全て調査して保存する計画が有名です。よく街中が美術館と言いますが、文字通り街全体が美術館なのです。その中でたくさんアーティスト、研究者が育つ。その中心に劇場、ヨーロッパでは劇場というとなまオペラハウスがある。このほかに現代音楽、現代のドラマ、子ども専用の劇場、そして児童絵画展なども行われる。この背後に職人の仕事があって、職人が街の中に住んで仕事ができる。この職人の仕事のことをイタリア語ではオペラという。オペラは音楽のオペラもありますから、オペラは非常に概念が広いですね。その創造的な仕事を商工会議所も応援する。

活かす生きる
ミュージアム

資本があったと思います。これが今も語り継がれていて、新井白石が「天下の書府」と評価したのは金沢でありました。歴代藩主は文化に湯水のごとくお金を使っていたと言われていました。戦後、金沢市は美術工芸大学を設立し、伝統環境保存条例を作り泉鏡花文学賞を作るなど、次々と文化政策を展開します。

都市景観を大事に

特に特筆すべきは金沢市立玉川図書館を世界的な建築家谷口吉郎、谷口吉生親子が作っていますが、この人たちは自分の建物だけ作ってダメで街が美しくないとダメだというので日本初の伝統環境条例に尽力され昨年その50周年を迎えますが、個別の建物だけでなく都市景観を大事にしようということは、昨年谷口親子の

現代アートによる都心再生と産業創造へ

「芸術は創造性あふれる将来の人材を養成する未来への投資」
開館1年目の入場者158万人、経済波及効果(建設投資を含む)
ミュージアムクルーズ事業の展開 →300億円以上
養豊、

「アートプラットフォーム」の展開
空き町家を活用した
伝統工芸や伝統芸能に前衛アートを融合
秋元雄史



建築博物館が金沢に登場しましたが、そこにも考え方が示されています。実は建築博物館は日本にその一館しかないです。ヨーロッパに行く結構あるように、金沢の文化的景観を守るという上でシンボリックな施設になりました。

金沢市民芸術村

それだけじゃなくて、ビルバオのグッゲンハイムミュージアムが完成する1年前、金沢市民芸術村をオープンさせた。これはロンドンのケースに似ていて、紡績工場をアートセンターに変えた。しかも24時間使える市民参加型施設にしました。それは当時の市長山出保さんと経済界のリーダーの福光松太郎さんの発案でした。私はその頃に市長から新しいミュージアムを創りたい、そのマスタープランに知恵をだしてと言われて、副市長と福光さんと私の3人で、これから金沢に必要なミュージアムの方針を議論しました。

小中学生を全員無料招待

一つはですね、先ほどOECDが地域の発展とミュージアムという報告書を出したと言いましたが、これから作るミュージアムは現代アートを中心にするけれど、地域の社会的、経済的発展に役立つものにして、多くの人が美術館を訪れる機会にしましょうということを入れました。そして、地元の工芸作家からの要望を受け止めて、現代アートと伝統工芸は違うけど、未来形の工芸ならオッケー、現代アートだと読み込みました。それによってこの美術館は素晴らしいスタートを切ることができました。オープンの年、

ニングで6ヶ月の滞在制作で彼が作った。こうした美術館を取り巻く創造の場を作っていくことに成功したのが金沢の現在に繋がっていると思います。どうもご清聴ありがとうございました。

小林

佐々木先生ありがとうございました。福島県立博物館で2010年から3年間、会津・漆の芸術祭という事業を行いました。準備していた頃、佐々木先生の文化創造都市の本を拝読して、触発されて街に出て行く事業を博物館としても始めていたことを思い出しておりました。今日もまたミュージアムの可能性を引き出すいろいろな方向性をお聞きできました。ここから対談に移ります。赤坂館長にも前にお移りいただきありがとうございます。準備が整うまでしばらくお待ちください。

「創造の場」としてのミュージアム

- 「創造の場」の要素
- ①アトリエ、ラボ
 - ②カフェ
 - ③シアター
 - ④アーカイブ



150万を超える人が参加しました。開館後半年間に地元の小中学生を全員無料招待した。このことがその後の金沢の社会にかなり深い影響を与える。美術館を訪れる人たちの属性を調べると学歴が高いとか所得や余暇時間が多いということよりも、小さい時から生の芸術に親しんでいるかどうかが相関関係があり、成人してからも頻りに美術館に足を運ぶという関係がある。これは大阪の自然史博物館もそうですね。子どもの中に博物館に来るようになって、大人になっても来る。そのことが実証され、開館後15年ですけれど入館者は250万を超えています。これくらいになると世界的に注目度が上がる。

ミュージアムクラスターが生まれる

そしてここから新しい産業の芽が生まれる。金沢の中心部にありますので、周りにミュージアムクラスターが生まれる。ミュージアム単体では実はあまり効果がない。様々なタイプのミュージアムが連携して街の佇まいを変えた時に、都市文化景観になるのです。そうするとそこからまた新しい展開のチャンスができます。で、既存産業も変わりますが、今最も面白いのは金沢美大の卒業生が金沢に戻ってきて3Dプリンターで工芸作品を作ることにチャレンジしています。工芸は伝統にとどまってはいいない。伝統工芸と名付けたのは伝統工芸の指定をしている経産省です。そうじゃなくて工芸というのは未来に向かって。今、世界の潮流は工芸の新しい作品がどんどん生まれている。クラフトビジネス創造機構などによってキュレーションするようになったことになってきました。こういう金沢の事

先生、ありがとうございました。

では、対談を始めます。「活かす・生きるミュージアム」、これまでの4つのお話を受け、お二人に対談を行っていただきます。ライフミュージアムネットワークの実行委員会委員長でもあります福島県立博物館赤坂憲雄館長と佐々木雅幸先生です。よろしく願いいたします。

対談

「活かす・生きるミュージアム」

大切な言葉を贈り物のように

赤坂憲雄

30分ほど話をさせていただきます。頭がくらくらしています。佐々木先生から大切な言葉を贈り物のようにいただけて、とても興奮しています。おかげでまともだった話はとんでもありません。午前中に3つの興味深いお話をそれぞれの現場からいただき、それが午後の佐々木先生の話と様々な形で繋がっている。あらためてそこから確認をしていただ方がいいと思います。ミュージアムの再定義、ICOMで議論が始まっている。おそらく何年かあとにはそれが一つの定義として我々の日本にも、あるいは地域にも降りてくる。

未曾有のカオスの中で

我々の県立博物館は30数年間リニューアルが来ずに足掻いてきました。この10年間は東日本大震災もあって、震災という未曾有のカオス



従来の文化政策の枠を超えた戦略を

日本では創造都市政策は今のところ大きな成果が上がっていると思っています。ですが、今日も冒頭申しましたようにアーティストや文化人、経済、行政、この人たちが集まって議論する場がまず必要です。そして、従来の文化政策の枠を超えた戦略を立てる。その中にミュージアムが位置づけられているということ。それがまさに創造の場を多様に作り出すということに他ならないというのが私の今日の結論でございます。ヤノベケンジさんの「ジャイアント・トラヤン」という作品があります。21世紀美術館のオープ

の中で自分たちに何ができるのか、お前は何者なのだという本当に厳しい問いを突きつけられて、無力感に苛まれながら手探りで探してきました。今日の佐々木先生の話の中には我々がやってきたことが、それでいいのではないかと励ましていただいた部分もあるし、そういうことはやれないという絶望感に近い無力感も感じなかったわけではないです。

昔の定義がまだ生きている

我々がそれぞれの小さな現場から出来る事はささやかなものだし、でも、そのささやかな動きが目指す方向性さえ間違えなければきっと出会う、博物館はそういう場所になっていくのだろうと思います。少しだけ震災後の福島県博の動きを思い返しておきたい。福島県博は学芸員が20人いて、自然、考古、歴史、美術、民俗の分野からなる総合博物館です。我々が震災後に問われたのは地域唯一の総合博物館である県博に何ができるかということ。そしてよかったと思うのは、我々は自分たちのそれまでの役割とかイメージを現実の中で越えていくしかなかった。冒頭に出てきた昔のミュージアムの定義を見て、くすりと笑ってしまっただけ。こんなことが定義であった時代があった。でもね、その昔の定義がまだ生きているのです。例えば一人の学芸員があつた古めかしいものを集めて研究して展示するみたいな。

どんどん被災地に行った

でも、そんなことをしていることを震災は許してくれなかった。幸いだったと思いますね。

活かす 生きる ミュージアム

ですから、我々学芸員は自然、考古、歴史、民俗というさまざまな分野の学芸員たちがどんどん被災地に行った。そこで被災した文化財をどうするかというところから始まり、震災遺産って何だ、こんなものは誰も集めたことないみたいなどころで動いていた。でも、本当に良かったなというの、例えば地震が動いた断層の断面を取った。それから被災した老人介護施設の津波にやられた壁紙を取ってくる、そういうことを、それぞれの現場でみんなやっていたのです。それは協働ができたから。

誰も やったことのないことを

考古学では当たり前前の地層の保存とかを一緒にやれた。普段は一緒にやることは少ないですけど。震災関連、あるいは文化財レスキューみたいなことが動くと同時にうちには変り者の美術分野がいた。博物館なのに美術担当がいて、肩身の狭い思いをしていたわけですが堰を切ったように。震災の前に「会津・漆の芸術祭」というのをやっていたことが大きいんですけど、「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」という形で、アートや文化を仲立ちとして、分断されている福島の人与人之间、コミュニティをどう繋ぐことができるかといったこともアートがやると許されて、訳わからないことやっていると認めて、訳わからないことやっていると認めて、思いながら巻き込まれていく。その二つの流れが県博を舞台として起こっていて、いつの間にかそれが合流していたかなと思います。普段の日常の動きの中では絶対に融合しないようなものが、カオスの中でやらざるを得なくて必死でやった。いろいろな動きにはちよつと生臭い

こともある。文化行政とぶつかる場面もあるわけですよ。誰もやったことのないことをやっていますから。

震災後の我々がやろうとして

もがきあがいてきたこと

でも、その中で今日の新しい再定義、ミュージアムの再定義にあつたいくつかの言葉、ポリティック、批判的な対話、包摂、さまざまな声に耳を傾ける、それらはまさに震災後の我々がやろうとしてもがきあがいてきたこと。何かイデオロギー的なメッセージを送りたいのではないのです。引き裂かれてさまざまな声に分断されてしまった、だからこそ、隣の人が何を考えているのかその声に耳を傾けたい。それを許してくれるアートあるいはミュージアムという場をいやおうなしに、我々は耳を傾ける空間、広場としてここに立てざるをえなかった。そういう意味で今日お話の中にたくさんのヒントがあつて、これまでとこれからをどう考えていったらいいのか迷う時の贈り物をいただいた。本当に感謝申し上げます。

民主主義の場です

佐々木

去年の9月のI COM会議、文化財をそれぞれの国に戻すとか、フランスはどうするか、日本は韓国に対してどうするか、そういう問題が大きな話題になっていけれど、それは後にして、それ以上に再定義の議論の中のスペースや広場

佐々木

それね、すごく面白いですよ。僕はじーっと考えたわけ。どう答えようか。なぜそんな場面に私が登場していたか、実はいろいろ伏線があつて、当時、小泉首相が靖国訪問した1週間後にそのシンポジウムがあつた。だから針の筵ですよ。しかも答えにくい問題がきたなと思つてね。そしたらパネリストのフランス人が実にフランス人らしい見事な回答をした。それ思い出して紹介しますね。みなさん我がフランス国民は民主主義という制度を人類、社会に持ち込みました。フランス革命でルーブル宮殿をルーブル美術館にして、そこでまさに人類普遍の価値ある文化財をお守りしていますと。民主主義も人類にとって普遍的価値のある制度。我がフランスはその民主主義の国家だから人類普遍の価値ある美術品を保存できるのです。よく考えてください。戦争があると最初に略奪され、破壊されるのは文化財でしょ。民主主義が定着してまだ間もない国もあります。韓国も数年前までまだ軍政下だった。まだまだ民主主義が発展していないので、もうちょっと時間がかかる。そこまでは言わなかったですが、でも、そこはもう分かりますよね。まだまだフランスが人類社会に貢献しているという、その切り口です。

優れた文化財、人類普遍の価値ある文化遺産。だからこれはナシヨナリティじゃない。どこにあるかというよりも人類普遍の価値があるものを安全に守るという論理。裏返すとこれは帝国主義の論理。だけど、フランス人ってやっぱり知恵があると思えました。それが文化大国です。ユネスコもバリエあるし。いつになったら日本は文化大国になれるのか。私は、フランスの方と同じように答えましたが、でも早い段階で日

という言葉にこだわりました。僕は広場という言葉、特にイタリアの広場が好きです。ピアッツァ、広場というのはそこに市民が集まつて、そこで直接議論する場所でもある。これを公共圏という。だからさまざまな声に耳を傾ける。まさに民主主義の場ですよ。この博物館の場所はそういう空間になる。それは有形無形の文化財を前にして語り合うということです。その中の震災遺産ですね。

地域の人々への限らない応援に

震災遺産、せんだいメディアテークがやっているような新聞の記事に出る大きな事件だけでなく身の回りの震災の記憶を掘り起こすプロジェクト。ああいうものがとても大事。大小の記憶を全部コレクションしている。個人の生活が再建してくるのがとても大事で、街全体が再建する上でも大事だけど、個人の生活を支援、再建する。それが大事かと思つています。兵庫県は人と防災未来センターを作りましたけど、ここはこの立派な博物館があつて、5つ6つのジャンルが横断的に取り組めば、これから世界的な場で評価されるような成果が上がってくる。それがおそらくこの地域の人々への限らない応援にもなる。そういうポジジョンを持つていて、赤坂さんはそこで本当に努力された。

赤坂

僕は宮城、岩手でもいろいろ動いているので少しだけ知つているんですけど、福島はやはり原発の事故があつたことで1年間はほとんど身動きができなかったと思います。ですから、宮

本からは返すようにしたいと個人的には思つていると質問者に答えました。

フランスの調査隊がアフリカで何をやったか

赤坂

1930年代の人類学者でもあつたミシェル・レリスの『幻のアフリカ』という本を見るとフランスの調査隊がアフリカで何をやったか分かる。まさに騙しと略奪の限りを尽くして運んでいったものが人類学博物館にあり、岡本太郎はそれを見て教育を受けた。その中の美術品として優れたものがケ・ブランリミュージアムに移つて、今はほとんど返却が始まつていると聞いています。膨大な世界の宝物のような美術品がたくさんあつて、もうくらくらする。それを集めたことをぬけぬけとそう言い放つて、返し始めるところがすごいですよ。返したほうが絶対にフランスの文化的地位は上がるに決まつている。

佐々木

ケ・ブランリはアートなのか宗教なのか。ギリギリのところのプリミティブ・アートですよ。奪われたほうからしたら単なるアイデンティティでは済まない宗教的な価値あるものを奪われている。さすがにフランス人もその辺は気が付いている。岡本太郎行きましよう。

太郎さんの展示に引っ掛けてうちの常設展示室に

城や岩手では例えば村の祭りとか民俗芸能が一斉に数ヶ月後には始まりました。でも、福島の場合は避難を強いられましたから、誰がどこにいるかも分からない状況になっていましたから1年ぐらひ遅れた。だから、初発の時期に厳しい分断、避難の中で声を交し合うことができなかった。震災の記憶や体験を語り継ぐということに関して遅れたと思います。

僕は民間だと思つています

遅れたと同時に福島的那种う記憶を掘り起こす場として、では我々のミュージアムがその中心的役割を担うことができるかという、僕はとても難しいなと思つました。むしろこれからやりたいと思つていますけど、僕は民間だなと思つています。政治とか、イデオロギーに公共施設はどうしたつて巻き込まれているのです。それに抵抗することも必要ですけど同時にさまざまな声に耳を傾けるのは、いろいろなところに生まれ、いろいろな形で組織されていけばいいと思う。ミュージアムにやれることやれないこともそれなりに僕は見て来たし、10年を迎えるにあつて本格的に民間のネットワークで福島の体験、記憶、声といったものを掘り起こしていく。それをアーカイブしていくことを民間レベルでやりたいと考え始めています。

ところで、どういうふうに問いかけをされたのか、文化財の返還について先ほど佐々木先生が言葉を飲まれたので、こちらこそ質問させていただきます。韓国で何と答えたのですか。

日本は文化大国になれるのか

赤坂

岡本太郎さんですか。太郎さん大好きですけど。これうちの図録です。平成21年、2009年に美術の二人がやりました。太郎さんの展示に引っ掛けてうちの常設展示室に45、46人の現代アートの人たちを呼び込んで、そしてインスピレーションを受けたところで作品を作ってくださいということやったのです。この人たちは何を考えているのだろうと思つた。僕はいつも受け身なので自分が何かしろと命令した事は一度もないです。いつも使われる身。でも、すごく面白かつた。めちゃくちゃでしたけど。だって、埴輪の横に現代アートの人形が置かれていたり、それを立って覗いている女の子の像があつたり。

それでもう非難轟轟でしたよ、始まつたら。先生が生徒を連れてきたら、小学生の子が先生これは何つて、そういう質問されても困るので、何とかしてくださいって。で、館の中でも大騒ぎ。こんなものは許されなみために。

でもね、僕が面白いと思つたのは、現代アートの人達の作品が横にあることによつて、もう20年30年とリニューアルできずに死にかけていたものたちが生き返る。これは一体何だ、そういう問いがいっぱひ生まれて、それこそザワザワ騒々しい博物館になりました。僕は面白い、毎年やりたいなと思つたけど、ついに一度もできていません。でもね、それが始まりだったと今にして思います。

佐々木

太郎さんは喜んだでしょうね。

赤坂

活かす生きる ミュージアム

喜んだ。喜んだ声が聞こえてきましたよ。はずはないね。これはいくつかのとんでもない試みだったので。日本のミュージアムは博物館と美術館に分断されているじゃないですか。それをぶっ壊した。そんな敷居下げた方がいい、出会つていいということ当了り前にしちゃおうと。

いろいろなミュージアムの人が

佐々木

今も美術館と博物館って日本語を当てて分けちゃつているのが面白くないです。ミュージアムの世界会議をやつたら、いろいろなミュージアムの人が来る。で、思いがけない議論になる。それはやっぱり創造性です。

ここから始まつたのだ

赤坂

ですよ。形とか分類に閉じ込めてしまうとこちらの思考とか美意識も抑えつけられて、抑圧されてしまう。でも、あの時に多分いろんなものが溢れ出して、ザワザワ囁き交わして、まさにさまざまな声に耳を傾ける広場になつていたのです。たぶんそんなことやつたのは日本全国、博物館で初めてと言われましたけど、誰も体験していないからその意味がよく分からなかつた。でも、今になってここから始まつたのだなと思つています。うちに変わり者の美術担当が何人かいたことの意味が今頃になって僕も分かつてきたような気がします。

佐々木

ここはそういう意味では総合博物館なのだね。

繋がる回路を

赤坂

総合博物館です。でも自然分野には鉱物と化石しかないのです。だから、震災の後、僕は自然史博物館を福島に作ろうと呼びかけたりした。動物と植物の担当学芸員がない。当然コレクションもない。そうすると福島で震災後に動物たちがどういう状況になっていくのか、植物にどういう影響が出ているのか分らない。聞きたくてもその問いに応えてくれる人がいない苦しみを感じました。

東大の先生たちのグループが入って、その人たちが調査したことを我々にどう還元しているか。何も聞かなくていいです。科学、学問、アカデミーというものは、きちんと地域、普通の人たちと繋がる回路を作っていかなければダメです。それは博物館も一緒。

佐々木

アーカイブは東大に持つていかれちゃうからね。

赤坂

僕らは知らないけど、東大の先生たちはいろいろなデータを持って戻って学術論文として我々には読めないような場所で発表されているのかもしれない。我々はそれを共有できない。そういう知の在り方、学問の在り方をきちんと批判するべきだろうと思います。

佐々木

まだまだ仕事多いね。

点がいくつも生まれてくることによって、我々のアイデンティティも柔らかく変わっていきける。そういう方向にぜひ京都の人たちも気が付いて欲しいと僕は褒め倒し、褒め殺し作戦に出て、文化庁の京都移転大賛成だと言ってきた。そして、なんかくすぐったそうにしていましたね。

佐々木

文化庁の審議会で私一人が、京都移転は意義があると言っても、ほとんどの方が東京の方で、東京から文化庁を持つていくなんてけしからんとみんな思っている。面と向かつては批判しません。陰でこそこそ言う。でも、そこで赤坂さん皆の前で意味があると言ってくれました。

赤坂

褒め殺し作戦。意味がある。本当に京都の人たちが自分たちの立場、役割をきちんと自覚して文化の都として地方、ローカルなものと一緒にあっていくような新しい仕組みが出来上がればそれは絶対大切。京都にしかできないと思います。今は苦しい状況かもしれないけど。

京都で全国の地域と連携していく

佐々木

実は869年、貞観地震の時に京都の祇園祭がスタートするのです。京都の夏に疫病が流行ったということもあるのですが、全国各地で震災、災害があり、特に貞観地震の被害が伝わる。それで全国の地域の数だけ66の鉾を立て、全国の安寧を祈ったのです。これが祇園祭の起源です。だから、決して京都は京都だけのことを考

赤坂

そういうふうを持つてくるのですね(笑)。あのミュージアムの連携から新しい文化的景観が金沢で生まれた。佐々木先生はその中心にいらっしやう。今、21世紀美術館は日本で一番入館者数の多い活発な美術館。そして工芸館も。

佐々木

国立工芸館の移転が決まって今年オープンします。これまた話すと長くなるけど、金沢創造都市会議という会議を20年前に始めました。記念すべき第1回の記念大会にはゲストに赤坂憲雄を招いています。

赤坂

全然覚えていません。20年前。

佐々木

その会議の中で、東京の三の丸にある近代美術館の工芸館、小さな館で東京にあっても注目されないけど、それを金沢に移転したらきっと世界的に大きなセンターになると思って提案した。地方創生の一環として省庁移転で各地方から何が欲しいか提案を募った。その時に京都府、京都市は文化庁を、石川県と金沢市は工芸館を要望しました。この二つはたまたま私の知り合いの馳さんが文科大臣の時に決まった。

赤坂

馳さん、いいことやった。

佐々木

いや、素晴らしいですよ。彼はこれだけでも

えているわけではなかった。私はそれがすごく大事なエポックだと思っています。祭りは特に死者を弔い、自然の力に対する畏敬の念を持つて、そして生き残った人々をエンパワーメントする。これが祭りの本来の意味です。だから、全国の安全を祈るような祭りを京都がやる。これはやっぱり文化庁の仕事ですね、東京ではなくて京都で全国の地域と連携していく。2年前、はま・なか・あいつのプロジェクトをさらに大きい規模でやりましょうと文化庁の京都移転と合わせてお願いしたことを思い出しました。

夢語りを

赤坂

本当に佐々木先生には要所要所で応援をしていただいて、我々の拙い手探りの試みに意味づけをしていただき、あるいは新しいステージに連れ出させていただいて本当に感謝申し上げます。

最後に夢語りをしておきます。ミュージアムの連携から新しい文化景観を作り出す一つの戦略、それを会津でやりたいと思います。どういうことかという、市町村合併が経済的な効率を掲げて行われましたが、震災の後に僕らが見たのは中心に全部集約される形で周辺部の村々が置き去りにされ、災害の時に被害を受けても放置されているような状況。合併というのは小さな地域の個性とか文化的アイデンティティを壊して、根絶やしにして、中心に全部償還するような形なのです。

そうではないモデルを作れないだろうか。それぞれの小さな村は人口が少なくなっただけで、厳しい状況に追い込まれていく。放っておく

後世に名を残すね。あの方は高校で国語の先生もしていたことがあり、文学も好きだ。だから、文化庁が京都に行くことには賛成だし、工芸館も合わせ技で通したのです。

赤坂

なるほど、佐々木先生は政治も分かっているらしいです。

佐々木

文化政策とは文化政治ってことです。

楕円的な思考が必要

赤坂

京都に文化庁が移転されて、そして金沢に工芸館。僕は東京に文化や芸術が一極集中していることの弊害があると思う。経済的に豊かな頃はお金がポロポロ降りてきたけど、経済的にきつくなったら真っ先に文化や芸術から金を吸い上げてというか、お金を降ろしていくシステムをどんどん壊す。それはそうです。あの人たちは文化や芸術なんて全然信じちゃいない。最初、文化庁が京都に行くとき聞いた時、何だろうと思った。でも、とても大切なターニングポイントが生まれるかもしれない。日本社会に向けて来た眼差し、やってくる人たちが東京とその周辺で完結してしまうのではなく、関西の京都、大阪から入ってそこから違う日本を見る、出会う体験をする。僕は楕円的な思考が必要だとずっと言ってきた。東京都という中心の同心円でしかものを考えられなくなってしまう。東京は経済や政治の中心かもしれないが、それに対して京都、金沢に文化芸術の中心とか活性化の結節

とそれをまとめて経済的に合理性が届かないところは切り捨てると言う話になると思う。そうではなく、例えば奥会津なら奥会津のエリアの中でそれぞれの地域の個性、面白いところ、そういうものを認め合いながら繋がっていくネットワーク型の文化連携みたいなものを本気で考える必要があるのではないか。その時にミュージアムの概念、今日いただいた包摂、ポリフォニックな響きあい、そういうものを一つの戦略的イメージにして、モデルのようなものを作ることができれば、僕はそれが抵抗の拠り所になりうると思う。

一つの中心にすべてが集約されるようなモデルに我々が身を寄せている限り、結局は切り捨てられていく。だったら、新しい抵抗のモデルという分散型のネットワーク、ポリフォニックな声が木霊しあうような広場が地域を丸ごと巻き込む形でやれないか、やりたいなとこの一週間ぐらい彼らと議論をしていました。全部繋がってくる気がしますね。

妄想を語っただけです。いつもこういうふうには僕は喋っちゃう。そうすると、そうせざるを得ない状況に自分が心地よく追い込まれる。

佐々木

なんかうまく終わりましたね。喋るだけじゃないでしょ。新聞のコラムで書くでしょ。

赤坂

書いてちょう。

佐々木

それで後で怒られる。

活かす生きる
ミュージアム



